大沢在昌著『影絵の騎士』読後感想

<< 作成日時 : 2008/08/23 16:19 >>

2008 年 8 月 23 日（土）

この本は昨年 6 月に初版が出た比較的新しい本である。

高井戸図書館にあるパソコンの検索で見つけた。どんなストーリーが差し出されるかとワクワクしてページを開いたのであるが、何と物語は 2040 年に設定されている。ナンテコッタイ SF ではないか、と投げ出しかけたのであるが、これまでも『天使の爪』で脳髄移植を扱い、『日本泥棒』で国家戦略を支配するコンピューターの出現を描いた大沢である。「待てよ、また何か仕掛けがあるに違いないぞ」と思って踏ん張り、読み続けることにした。

なるほど大沢ワールド満載である。

物語は、「オガサワラ」で隠者のような生活を送る元私立探偵ヨヨギ・ケン（その前

は警察官）の生活の描写から始まる。

現在から 40 年後の東京は新東京と呼ばれていて，近郊の県の一部を併合したさらに規模の大きなメガロポリスとなっている。問題なのは、旧新宿、渋谷、池袋などのかつての盛り場が、混血児たちに占拠された形によってスラム化し、純粋日本人は住まない地区と化していたことである。その子供たちは「ホープレス・チャイルド」と呼ばれ、ゴミ扱いされていたのであるが、その子供たちの間に奇病が流行って数が激減し、混血児たちはもはや恐れられる存在ではなくなったのである。

犯罪に明け暮れして恐れられた存在であった混血児たちであるが、むろん真面目に生活し勉学に励んだ挙句、医師や弁護士などになることの出来たホープレスも少数ながら存在した。この物語の主人公であるケンもホープレス出身なのである。ホープレスは純粋日本人に差別され蔑まれ貶められている。

話は前後することになるが、中心部が極端にスラム化した新東京を再生するために、都は東京湾に千代田区に匹敵する大きさの人工島を造成し、そこに大規模な原子力発電所を建設したのである。

当初の計画では国会を含む行政府が移転するはずであったが、原発の存在を嫌った役人たちの反対で移転計画は中止になり、巨大な空き地になってしまった。そこに目をつけて都と売買契約を結び、アイランドに世界のどこにもない映画撮影所を創り上げたのがワン･コングという中国系の天才プロデューサーである。

物語に至るまでの説明が長くなってしまったが、近未来に時代を設定した作者の意図と主題を伝えるために、最低限必要な情報であると思ったからである。むしろ、物語の方は極端に内容を省きながら紹介することになる。なぜなら、物語の展開は途轍もなく錯綜していて複雑でややこしいからである。詳しく説明しようとした

ら、本のダイジェスト版のようなものとなり、ページがいくつあっても足りないということになる。

さて、オガサワラに隠棲する元探偵に連絡を取ってきたのが作家として成功したヨシオ・石丸という人物である。この人物の出身はホープレスで、子供時代同じホープレスのヨヨギとは遊び仲間であり盗人仲間であった。

ヨシオはいま、人工島（別名ムービー・アイランド）の帝王と呼ばれているワン・コングの孫娘と結婚しており、成功した天才作家という肩書きに比肩する権力と地位を築いている。

いまやムービー・アイランドは、世界中の金持ちが暮らす別天地なのである。帝王の孫娘はアマンダという名で、撮影所の看板女優であるばかりではなく絶世の美女である。

彼女の夫である作家のヨシオがヨヨギにコンタクトを取ってきたのは、ムービー・アイランドで規模の大きい保険金詐欺が行われている可能性があるので、それを調査して欲しいというものであった。

最愛の連れ合いをホープレスの間に流行った奇病で亡くし生きる希望すら失っていた元探偵は、自分の死に場所が見つかったと思い、作家の要請を受け入れる。

ヨヨギはそんじょそこらの探偵ではなく、警察官のときに日本のヤクザ組織の息の根を止めるという大仕事をやってのけた伝説の人物なのであった。そのときにコンビを組んだ同僚は池谷という名の純粋日本人で、ヨヨギを「このホープレスめ！」と罵りながらも、二人は絶大な信頼関係で結ばれあっている。

ヨヨギは知り合いの韓国料理店で手に入れたブレンティンと呼ばれるオートマテ

ック拳銃を懐に、いよいよムービー･アイランドに乗り込んで行く。島には、二つの映画製作会社があって、互いを競い合っている。しかも、一方はチェチェン人、方やロシア人が中心になって運営している。しかも双方共にマフイア組織なのである。そこに、原発を守る原警、撮影所を警護する SS と呼ばれる独自の警備組織が絡んで、チャンチャンバラバラならぬど派手なドンパチが展開されるという仕組みである。

その過程には複雑な人間関係や状況説明が物語られるが、そこは本を読んで堪能していただく外はない。むろんどんでん返しが用意されているのだが、それをまことしやかに述べるのは「バカ」としか言いようがない。

作者が述べたかったことの一つは、映画という芸術の形態を巡る議論である。映画は芸術なのか、それとも産業なのかという大問題を、物語りに絡めて多くのページを割いて論じている。また物語の核心となる犯罪の中心に、ネットワークと呼ばれる TV 網羅組織があって、映画と TV の関係についても論じられている。ムービー･アイランドという主題の関係上論じぜざるを得なかったという側面もあるが、現代においても白熱した議論が必要であろう。

メディアを支配することの出来る人間（組織）こそ現代社会の支配者であるからである。だからこそ、我々はメディアに対する批判意識を常に持っていなければならない。

極端に言えば、首相も大統領もメディアの意向によって決まるのが、今という時代なのである。

物語は、いつもの通り派手な結末で終わる。大沢のどの小説もドンパチや爆発

による大量の殺人で終わるのが常である。ここにエンターテイメントの限界がある。つまり大沢の限界がある。

大沢は、派手な殺し合いによってカタルシスを意図しているのかもしれないが、返ってそのことが物語のリアリティを損なっているというべきである。シュワルツネッガーやランボーの映画の大量殺人に我々は飽き飽きしているのだ。

純文学である必要はないが、カタルシスの意義について真剣に考えてもらわなければならない。

日本相撲協会の陰謀

２００８年３月２３日

大相撲春場所が千秋楽を迎えた。

そして予想通りの横綱対決となり予想通りに朝青龍が勝った。この結果を相撲協会はどんなに待ち望んでいたことであろう。

さてこれからの話は、何の根拠も証拠もない一種の推理小説と思って読んでいただきたい。 協会が待ち望んでいた結果というのは、自分たちが入念に描いてきたシナリオが、目立った破綻もほころびもなく無事完結したという意味である。

むろん発端は朝青龍のサッカー事件だ。

人気横綱が怪我を理由に巡業を休み本国に帰ってサッカーに興じていた、という前代未聞の不祥事が発覚したことにより協会内部に激震が走った。

そうでなくてもその言動が問題視されていた横綱だけに、一時は北の湖理事長を始め、幹部理事の総退陣に繋がりかねない大事件であった。

連日マスコミは報道し、横綱審議会委員までが苦情と批判の言葉をマスコミに語った。協会幹部は連日額を突き合わせて対策と秘策を談じ合ったに違いない。その結果朝青龍の二場所連続出場停止というペナルティが課せられた。

シナリオは入念に作成された。まず横綱の謹慎状況をマスコミに小出しにする。処分を受けた横綱は部屋に閉じこもり、電気も付けないでじっとTVを観るだけの生活を続け、誰が話しかけても反応しない一種の精神病者の役を演じ続けた。

無精髭をのばし幾分やつれた空ろな表情の横綱をTVで観る一般人は、その完璧な演技を信じてしまう。

そうした状況を打破するためには、本国のモンゴルに一時帰国することが最良であるという考えを、相撲協会の息の掛かった精神科医に語らせる。朝青龍は限界にまできた演技を帰国によって続けなくて済んだのである。

もちろん、帰国自体筋書きの一部であることは言うまでもない。その間、引退や復帰という話題をマスコミに提供し続け、相撲の話題を止切らせない工夫を必死に続ける。

そうした矢先、時津風部屋による力士暴行致死事件という予期しない出来事が発生する。この事件は誰が考えても北の湖理事長の辞任が不可避な事件であるが、なぜか部屋の親方の尻尾切りで決着をみる。

むしろ、この事件は朝青龍の謹慎問題から世間の耳目を逸らさせる役目を果たし、謹慎が明けて相撲復帰に意欲をにじませて帰国する横綱の「病が癒えた」元気な姿を公開する。まるで謹慎明けに合わせたかのような横綱の笑顔は「病い」が演技に過ぎなかっただけに当然のことであり、日本に帰ってきた横綱の次の場所への期待を喧伝する材料となった。この点で、朝青龍の忍耐強い演技を誉めなければならないところだ。

横綱の完璧な演技と相撲協会の良くできた筋書きは、次なるシーンに移行する。

すなわち、昨年の福岡場所がその舞台である。悪役となった朝青龍は、優勝することは絶対許されない状況といえる。善玉を演じるおとなしいもう一人の横綱白

鵬が悪玉麻青龍に負けることは、相撲協会の面子に関わることだからである。
　もし、朝青龍が勝つようなことがあると、悪玉が雄叫びを上げるに等しく、朝青龍は「ざまーみろ」とばかりますますでかいと態度を取ることになるのは必至だからである。謹慎処分を下した協会の面目は丸潰れとなる。どういう圧力・談合があったかは定かでない。

　私は、その取り組みを剣術の仲間とTVで観ていて、絶対に白鵬が勝つと予言した。一万円賭けてもいいとまで言った。そうして、次の場所は朝青龍が勝つことになっていると確信に満ちた口調で仲間に告げた。結局は一万円ではなく千円賭けて私が勝った。

　それにしても、あれだけ完璧な演技をし通した朝青龍が、明らかにわざと負けたと分かる負け方をしたことが疑問に残る。横綱に上り詰めた完璧なプロ中のプロが、誰にも分かるような仕方で土俵に転がるなんてことは信じられない。
　つまり、彼は、負けてやったのだということを、相撲フアンに、そして特に自分に過酷なペナルティを科した相撲協会と横審、そしてさんざんに自分を痛めつけてくれたマスコミに、わざと見せ付けたのではないか。
　明らかに朝青龍の技と力は白鵬にまさっていた。負けてやったことで、白鵬と協会は決定的なダメージを受けることから免れ、同時に、次の場所では朝青龍が優勝することが運命付けられたのである。同じモンゴル人同士だ。その辺りは上手くやっているはずである。

　さて、つい先方終わった春場所の横綱対決の後、筋書き通りに優勝した朝青龍

は、これまでどんな優勝者もしたことがなかった喜びの動作をあえてしてみせた。花道を下がりながら両手を挙げて、何度も館内のフアンの歓呼に応えてみせたのである。

さらに、土俵際での優勝インタビューで、わざわざ大阪弁を使って「わしは大坂が大好きやねん」などと大声で叫んで見せたのである。あたかも、後で何を言われようとも、因縁のこの勝負に勝ったことを最大限に喜んでいるかのごとく。

この勝負で白鵬はいつもの落ち着きは全くなく、相手に遮二無二突っ掛かって行った。その反動を上手く利用して投げ飛ばしてくれよ、と言わんばかりに。誰にも疑われることのない上手な負け方とは言えない。

これからどうマスコミや相撲フアンが言い立てるかは分からない。こうしたことも全ては、日本人力士の不甲斐なさと相撲協会の陰湿にして閉鎖された体質がもたらしたものである。

昔は、八百長と思われる取り組みでも、一般のフアンにはばれないような巧妙にして真摯な「勝負」が行われたものだ。

プロの興行であるからにはある程度の談合試合は仕方がないところもある。しかし、明らかにそうと分かるような勝負は願い下げである。

あれもこれも力士の技能の低下がもたらした結果であると言えるのかもしれない。

かくして、めでたしめでたしの春場所は終わった。

北京オリンピックと民族問題

<< 作成日時 : 2008/08/24 17:31 >>

2008 年 8 月 24 日

8 日に開会式を迎えた北京オリンピックは本日閉会式を迎えようとしている。

スポーツ好きの私は、時間が許す限り競技に見入ってきた。スポーツ選手の最高の舞台であるオリンピック競技で、金に輝いて狂喜し歓喜の涙を流す選手、優勝候補と目されながら初戦で敗れた選手の落胆と慟哭、人間感情の両極を見させてもらった思いである。

スポーツに人種の差別･優劣はない。たとえ小柄であっても辺境の小国に住んでいても、卓越した技術と持久力を持った選手が優勝することが出来るのがスポーツの世界である。私は TV 画面から伝わってくる熱気と迫力に圧倒されまた感動し、涙さえ流して観戦してきた。

だが、この北京オリンピックの背後には様々な問題が山積していて、スポーツ競技とは別の問題について思うことがあったのも事実である。

マスコミで毎日のように報道されている民族紛争がそれである。

開会式では、中国全土から集められた少数民族の子供たちが、それぞれの民族衣装をまとって国旗を運んで いたが、その中の一人にいたはずのチベット族、ウイグル族が中国からの独立を求めて活動を活発化させている。（後に分かったことであるが、民族衣装は着ていても、大半が漢族の子供たちとのことである）

そういえば、中国はメダル獲得数が一番と報道されていたが、表彰台に上る人たちは（その顔つきや肌の色からして）すべて漢民族のようにしか見えなかった。敢

えて言えば、チベット人やウイグル人の顔かたちは見ることが出来なかったような気がするのである。

画面に写っていない種目や見落とし見間違いなどで、実際にはそれらの種族の人たちが活躍した場面もあったのかもしれないが、私には見つけることが出来なかった。

両民族の選手があらかじめ排除されていたということはなかったのであろうか？単なる思い込みにすぎないのであろうか？

中国は弾圧によって両民族の独立運動を押さえ込み、そのために多くの人たちが犠牲になり、大量の投獄が続いている。肌の色や言葉、風習、宗教の異なった人たちが自分たちだけの国家を作りたいと願うのは、当たり前のことなのである。

何故独立させないのだろうか？何故自立を認めないのだろうか？

これらの疑問は余りにも単純過ぎるといわれるかもしれない。背景には、国家としてのプライドの問題、国益、軍事、経済など様々な問題が絡んだ上での抑圧なのであろうが、抑圧弾圧による国家イメージの失墜、軍費急増による経済への圧迫、流血による人間存在への絶望などを考えると、割の合わない行動のように思えて仕方がないのである。

自国に併合した地域の独立を許さない国家の意思は、様々なマイナスの要因を上回る利益となるという思惑があるからこそのものであろう。だが、そうした思惑は、平和、独立、自由を求める人類共通の念願に逆行するものである。たとえ領土が少しばかり縮小しても、同じ民族、言語、宗教、風習を共有する平和な国家を築くことが出来れば、その方が長期的にはプラスとなるのではないだろうか。

小国が真っ二つに割れてしまうような事態になれば、深刻な紛争も止むを得ないであろうが、中国やロシアのような広大な領土を有する大国が、なりふり構わず地域の独立を阻止しようとする醜い姿は、人間に内在する野望と権力への意志、血に飢えた暴力への渇望を思い起こさせ、人類というものの低俗さを見せ付けられるようで気持ちが暗くなる。

これではいつまで経っても人間が好きになれるはずはない。またアメリカのように、世界の警察官を自ら気取って他国に軍隊を派遣する行動も同様に醜い。

紛争、暴力、戦争、殺人は、人間の固有の遺伝子でもあるものとして無くすことは永久に不可能なのであろうが、せめて理性を駆使して、世界中の人が納得しうる解決を見出す努力を実らせることが出来ないものであろうか。

人類への絶望を募らせる行動をこれ以上見たくない！

浅田次郎著『輪違屋糸里』読後感想

<< 作成日時 : 2008/08/16 12:26 >>

2008 年８月９日

この本の初版が出版されてすでに 4 年が経過している。

出版された当時読売新聞で書評紹介があったことを憶えており、幕末の新選組との関わりが述べられていることは承知していた。

ただし、浅田次郎という作家を(何故か)読む気がせずそのままにしていたのであった。

数日前図書館に出かけて行った時、他に読む本がなかったのでこの本を借りることにした訳なのである。

私の読書体験というのはいったいにオクテで、評判になった本をすぐに読むということをしない。

ミーハーのようできまり悪く手を出さないでいるうちに、「かつて評判になった本」になってしまっている。

そういう意味では流行に後れており、仲間でホットな話題になっている時に話に参加することが出来ないのである。

前置きはともかくとして本題に入ろう。

題名は京都の遊郭島原を代表する輪違屋の芸妓糸里であるが、主人公は発足したばかりの新選組であり、初代局長の芹沢鴨である。

芹沢とその一派はどの書物にも悪役として描かれ、仲間による粛清は必要悪とされてきた。

だが、この本に描かれる芹沢はむしろ権謀術数渦巻く上部組織に陥れられた被害者であり、純粋無垢な心情を有する真の武士として描かれる。

反対に近藤、土方派は本物の武士になりたい一心の百姓の成り上がりに過ぎず、特に土方は、冷酷非情な策謀家としての描写が際立っている。

つまり、司馬遼太郎によって定着された感のある新選組像をひっくり返そうと企図されて書かれた作品といえる。

芹沢が大筒を持ち出してきて生糸問屋の豪商大和屋を焼き討ちするシーンは、どの新選組物語にも出てくるが、その理由は、朝廷と天誅組には一万二千両も寄付したのに、新選組に対しては寄付を断った大和屋に対する芹沢の嫌がらせであるとする解釈がほとんどである。

しかしこの本では、大和屋焼き討ちは、京都守護職の会津藩が芹沢をたき付けてやらせた謀略であるとする。

芹沢一派粛清の又とない口実を与えるものであった。

かくして芹沢は、同志である土方や沖田たちに、同衾中のお梅（この小説では侠気に富んだ威勢の良い江戸女として描かれている）とともに斬り殺されてしまう。

輪違屋の天神（芸妓の階級名）糸里は土方の思われ者として登場し、芹沢暗殺にも一役買う。

彼女は子供のときに島原に売られ芸を仕込まれて禿(かむろ)、天神と出世してゆく。

そうして、正五位が許されている（大名でも従五位止まりが多い！）太夫に上り詰めるのである。

島原随一の太夫にまで上り詰めた糸里こと桜木太夫が、一橋中納言(慶喜)と会津中将（松平容保）が待つ揚屋に向かい誇らしげに道中するラストシーンは感動的である。

私たちは、この本から物語の本筋とは別に妓楼というものの構造、風習などを学ぶことが出来る。

島原というのは江戸の吉原と同様、遊女の群れる娼館と思ってしまうが、本来は鍛え込まれた芸を披露する芸妓の館なのであり、春を売る娼窟ではないということを知る。

太夫は天皇の御前で芸を披露することを許された殿上人なのである（それゆえ正五位という位を与えられている）。

とはいえ、芸を売る女性たちが身を売るようになることは、避けることの出来ない現実といえる。吉原と同様島原もその現実から逃れることは出来なかった。

むろん、決して身を売ることのない誇り高い芸妓が存在し続けたことも事実なのである。

現代人にとって剣術とは何なのか？

<< 作成日時 : 2008/08/30 16:20 >>

2008 年 8 月 30 日

私は剣術を始めてまだ 20 年ほどにしかならないが、いかにして人をうまく斬ることができるか、と思慮をめぐらせて刀を振る度に、何かしら眩暈に似た感覚を味あうのである。つまり、私は刀による効果的な殺人の方法を研究しているわけである。

現代では刀で人と斬り合うことはありえないのであるから、剣術というそのことを心身の鍛錬、伝統文化の伝承と割り切ってしまえば済むことであるが、実際に剣を振るって巻き藁などを斬っていると、突然襲う眩暈から免れることは出来ない。

それにしても、我々現代人がいにしえの剣客･剣豪に憧れる気持ちは、いったい何なのだろうか？何に由来するのであろうか？

何かの記事で見たことがあるが、小説を読む現代人の約半数が時代（歴史）小説を手にしているそうである。

歴代徳川将軍の名や初代首相の名は失念していても、塚原卜伝や宮本武蔵の名は中年を過ぎた人なら誰でも知っている。これほど左様に刀で殺し合いをして生き抜いた先人は有名人なのである。

彼らに対して我々が憧れるのは、幾度も生死の場に身を晒してその都度生き抜いた、強靭な不動心と刀術の妙にあることはいうまでもない。今の我々にとって絶対的に不可能なことを彼らがやり遂げた、ということに対する憧れと尊敬――。

何人の相手を斃したかということに対してはさほど興味はない。一対一で向かい合って、まかり間違えば命を失う場で相手を斃して生き残る、そこに私たちは他に

比較し得ない究極のドラマを見るからである。絶対に斬られる恐れのない桃太郎侍や吉宗将軍が、バッタバッタと切りまくったところでそこにはドラマもなければ緊張感もない。

　剣術の稽古で斬り合いの擬似体験をすることによって、極度に膨らんだ想像力の頂点で死の予感におののく―おそらく私が感じる眩暈というのは、そのことなのであろう。

ある舞踏家の死

2008 年 9 月 6 日

8 月の最終日ながら、この日は身体がけだるくなるような蒸し暑い日であった。

午後二時中野富士見町駅で、ジャズドラマーでありバラフォン奏者である中村達也さんと待ち合わせる。共通の知人である舞踏家・五井輝さんの追悼式が駅の近くの「プラン B」という小劇場で行われることになっており、私たちはそこへ出席しようとしていたところなのであった。

懐かしいコヤの名である。私はかつてそこで五井輝さんの、田中泯さんの素晴らしい舞踏を観た。その場で、先々月がんで亡くなった五井さんの追悼会が催されるのである。

五井輝、享年 63 歳。

初めて五井さんの舞踏公演を観たのは 20 数年前のことになる。そのころはまだ

北海道に住んでいた私の若い友人が誘ってくれたのである。

会場はまさしく「プラン B」であり、まだ出来たばかりのことであったように思う。

そのときの五井さんの踊りがまぶたの奥深くまぶしく張り付いて、いつか必ずこの人と一緒に詩朗唱公演をやりたいと心に誓った。

その機会は数年後にやってきた。

大塚駅前の「大塚フォーラム」という劇場の支配人をやっていた女性から、ここで何かやってみませんか、という声を貰ったのである。それはまさに天から降ってきた声のごとくであり、私は即座に五井さんとジャズドラマーの中村さんを共演者として指名した。

当日五井さんは小道具として大きな銅製の球を持参していたが、会場の入り口から中へ入れることが出来ず、使用を断念したことを憶えている。五井さんのスタイルは全身しろ塗りのいわゆる暗黒舞踏派の舞踏スタイルであるが、背中に彫った龍の刺青が何ともエロティックでかつ凄みを利かせており、前に一度見ていたにも拘らずいかにも鮮烈な印象を残すのである。

競演後は公演の都度案内を送ってくれるようになり、何度か会場に足を運んだものである。

二年後に、中村さんが目黒の「東邦生命ホール」で、ニューヨークから一流の黒人ミュージシャンを呼んで行ったニューヨーク・ユニット公演には、黒ずくめのダンディな服装で駆け付けてくれた。

終了後、私たちは二人だけで駅の近くの居酒屋で久し振りの再会を祝した。しかし、そのとき彼は余り酒を飲まなかったように記憶している。後年肝炎を患っているということを人づてに聞いたことがあり、もしかしたらそのとき最中だったのかもし

れない。

　五井さんは変わらず案内を送ってきてくれていたが、だんだん脚が遠のくようになり、そのうち会場に顔を出すことがパタリと止んだ。三年前今の地に引越しをしたときにも引越し通知を出さなかったように思う。

　そうして五井さんとの接点が絶たれ先々月の訃報となったのである。何故脚が遠のいたのか、自分でもはっきり言うことは出来ないが、そのころはすでに剣術に夢中になっていて、他の事に首を突っ込む余裕がなかったのであろう。

　訃報を知ったのは中村達也さんからの電話である。

　このところ、友人知人が相次いで亡くなっており（しかもそのほとんどの人が私より若い）、次は私だという思いが強く、もう誰が亡くなっても驚いたり悲しんだりせんぞ、と心に決めていたのであるが、ずっと気になる人が死んだと聞くと、頭上からズシンと何かが落ちてきた心地がして、心に湿った空洞が広がってゆくのを感じざるを得ない。

　五井さんの訃報に驚き絶句していていると、達ちゃんは、共演した仲間であるので一緒に追悼してあげようじゃあないかという。もちろん一も二もなく共鳴し共に出向くことにしたわけなのである。

　懐かしい「プラン B」がそこにあった。

　40 名も入れば満杯になる小劇場であるが、その倍もの人たちで溢れていて、追悼の会場にふさわしくないと思われるような熱気が立ち込めていた。

　田中泯さんの司会で式は始まり、五井さんと関係の深い関係者の話があり、詩の朗読があり、今は未亡人になった奥様のそれ自体がポエジーでもある挨拶の言

葉があって、前方のスクリーンに生前の五井さんの舞踏公演の姿が映し出された。

私はその映像を見ていて、彼は、思索者のように内面深く降りていって、無意識の領域をも取り込む意志を働かせ、一途に心の闇と情念を肉体の動きに託そうとした「筋肉の哲学者」のように思えた。

言葉の世界は別として、暗黒舞踏ほど人の内面や情念を表出できる表現手段は他にはない。

西洋のバレーのように外に向かってエネルギーを表出するのではなく、内に向かって限りなく収斂してゆくのだ。　それゆえ重く暗い状況が現出するが、それは内面の本質の姿なのである。

五井さんはそのことを一番良く知っていた舞踏家ではなかっただろうか。

「プラン B」の創設者である田中泯さんもその一人であるが、20 数年前に草月会館で踊った生命誕生の輝くばかりの寓意に満ちたあのエネルギーは、今や伺うことは出来ない。

私はこの会場で二つのサプライズに出会った。

その一つは、五井さんの未亡人が、現在飲み友達として親しく付き合っている画家の春原武彦さんの奥様の妹さんであったこと、もう一つは、40 数年前に卒業した大学の同級生と出会ったことである。

その人は中村文昭。

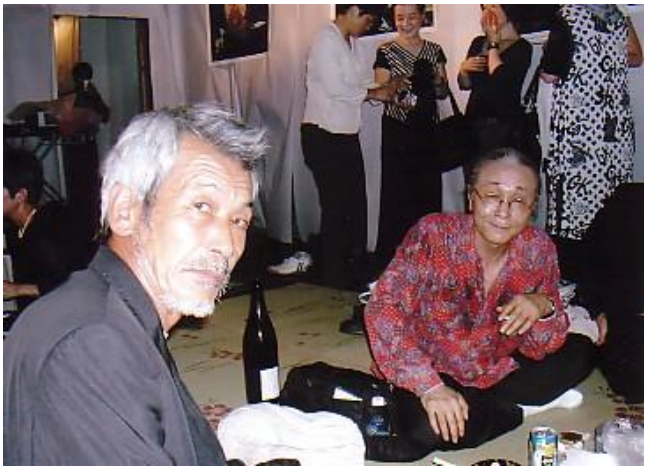
詩人であり、著名な舞踏評論家であり、日芸の教授であることはその活躍で知っており、この場に姿を現すであろうことは予想できたが、ついに 40 数年ぶりに言葉

を交わすことになったのである。

懇親会に移った直後私が声を掛けると、彼は眼を輝かせて私の手を強く握り締めてきた。彼は詩朗唱家としての私の活動を知っており、いわば互いに気にし合っていた同志が必然の場で出会ったわけである。

挨拶程度の言葉を交わす内、私が今では剣術の虜になっていて言葉は忘れてしまったと冗談のつもり（半ば本気？）で言うと、彼はくるりと背を向けてしまい肩を狭めてみせた。

私は茶碗でガブガブ日本酒を飲み相当に酔っ払っていた。仲間と車座になって飲んでいる田中泯さんを見つけ、強引に隣に割り込んで話の輪に加わった。



手前田中泯氏、奥中村文昭氏

彼は今や著名な俳優であり、山田洋次監督の「たそがれ清兵衛」で、主役の真田と死闘を演じた武士の凄絶な演技と全身からかもし出される強い存在感は、忘れようにも忘れることは出来ない。

即座にそうした話になり、私は彼に矢継ぎ早に質問したのであるが、その一つ一

つに丁寧に答えてくれ、リハーサルのときに真剣を使って殺陣を稽古したという話は興味深いものがあった。相当に緊張し恐ろしかったそうである。

　そのうち彼はフッと席を立ってどこかに消え、二度と席に戻ってくることはなかった。

　思えば、誰かと向かいあう機会があるとすぐに「たそがれ清兵衛」のことを持ち出され、心底うんざりしていたのではないだろうか。後でそのことに気付いたがもう遅い。

　私はおそらく歩くことも覚束ないほどに酔っていたにちがいない。会場をいつ出たのかその記憶がないのである。 むろん、達ちゃんが一緒にいてくれ、身体を支えてくれていたのは記憶しているが、（また雨でぬれた歩道で脚が滑り左膝を捻挫したことも記憶にはあるが）、事後のすべては朦朧とした記憶の世界でしかない。

　五井さんは私に、一途に内面に向かうことが表現の根源であり、それ以外にはありえないことを、あの会場から私に伝えてくれたような気がいましている。

何故私は存在するのか？

<< 作成日時 : 2008/09/13 20:05 >>

2008 年 9 月 13 日

私たちは日々仕事と時間に追われあわただしく一日を過ごし、時には夢をも見ないで翌朝を迎える。

日々ほぼ同じことの繰り返しと言ってよい。

ときおり、いったい自分は何をやっているのだろう、何故一日がこうしてあっという間に過ぎてしまうのだろう？と反省してみることはある。

だがそれも「とき」というものの一齣であり、翌日には忘れ果て、繰り返しの一日を終了するのである。感慨は忘れ去られることによって次の新しい感慨を生み一日の「とき」に加えられる。

私が毎日のように繰り返し思うことは、何故私が男であって、前を歩くミニスカートの女性が女なのであろう、何故男と女がいてそれぞれの役割を意識しながら生きているのであろう？という疑問である。

自分が男であることは間違いないのに、どうしてそんな疑問を持つのだろう、と不思議な気持ちにならないでもない。第一、そうした疑問を持つこと事態がおかしいと思ってしまうこともまた事実なのである。

そうした疑問は私とはいったい何なのだろう？という思いに行き着かざるをえない。そこから哲学問答を始めても思考の混乱に行き着くしかない。

しかし、私とはいったい何なのだろう？という疑問は、何故私は生きているのだろ

う？という問答に当然行き着く。 生まれたから生きているのだ、と言ってしまうことは簡単だ。

では、何故生まれたら生きてゆかなければならないのか？と考えざるをえない。

それが生き物としての本能だから、この世に生を受けたからには生き続ける義務がある、と即座に答えを出すことは出来る。

自分の意志で生まれたわけではないのだから、自分の生は自分の意志で決着をつけることが出来る、という考え方は当然のことであり、理由はどうであれ自殺者は後を絶たない。

そこには何の問題も無いようにみえる。もし自分の存在や生に疑問を持つのならさっさと死んでしまえばいいではないか、ということになる。

ところが、現実には自殺者はほんの少数で、この世に生を受けた人たちは病気や事故や老衰などで命の灯が消え果るまで必死になって生きようとする。

必死になって生きて何をしようとしているのか、何を求めているのか、ということを突き詰めることが出来ないままに人は生を終える。

むろんそれでいいわけである。

人類に貢献しよう、子孫たちのためになることをやって死のう、そう考えて大きな業績を残す人たちもたくさんいる。だがそれがどうだというのだろう？

たとえ今生きている我々や子孫たちが生きていることに喜びを感じる画期的な発明や発見が行われようと、日々私たちが生きているというそのことの疑問に対する答えを提出してくれるわけではない。

依然として私たちは、何故男と女がいるのだろう、何故自分は今ここに存在して

いるのだろう？という疑問に悩み続けなければならない。

　こうした疑問はいくら突き詰めても解決することはない。解決（永遠の中断）は死しかないのである。

　人間は想像力というやっかいな手段を有しているから、基本的に死も解決にはならない。

　ひたすらに悩み、墺悩し、一日をどうにか生き残ることによってしか乗り切る道はないのである。

　悩むというのは自分の存在に責任を持とうと努力する行為ではなかろうか。

　悩むことを嫌う人は、ただひたすらに行動し悪行によって一日の充実を得ようとする。結局は悩みから逃れられないのであるが、自分と適当に折り合いをつけることによって一日を消費する。

　そうした行為の集積が人間を曖昧な存在に仕立て上げてゆく。人間存在への嫌悪を涵養してゆく。

　悩みの種類は様々であるが、その一つ一つと誠実に対応してゆくことによって、悩みは喜びに転化してゆく。

　ただ一日をやり過ごすだけの日々とは違って、明日生きることに希望を見出すことが出来るようになる。

　本当は一日が同じことの繰り返しではないのだ、ということを実感することにつながってゆく。

　それを日々持続することは不可能であるが、一日でもそのことを体験できれば、

生きるということが無益なことではなくなる。

たとえ、人類がこの地球に存在することが、他の生き物を圧迫し絶滅に追い込むことになろうとも、悩みと誠実に向き合う生き方があれば許されることでなくてはならない。

悩みと誠実に向き合うことによって、人は個人の次元を超えて人類の運命、地球の運命と向き合うことになるからである。

このように書けば、楽天的な性善説を述べ立てているように思われるかもしれない。

人間には憎悪と無関心（好奇心）という逃れることの出来ない特性がある。これがあるから権力欲、征服欲、自分だけの世界の創造という世界が付随する。これがあるから人間は人間たりえている。

人間の想像力と感情はどこまで膨れ上がるか予想が出来ず、個々人の諍いから始まって、戦争や民族紛争という形で殺し合いを続けている。

この二つをコントロールすることが出来るようになったとき、すでに人間は人間ではない。

それゆえ人間には未来というものはない。

あるのは無限の悩みを抱えた現在だけである。

せめて、唯一無二の居場所である現在が、個々の、小さな悩みの解決を伴った、喜びに満たされた一日であることを願わざるをえない。

肝臓妄想

<< 作成日時 : 2008/09/21 19:21 >>

2008 年 9 月 21 日

ある居酒屋で。

社員 A「課長はほとんど毎日酒を飲んでおられると聞いていますが、本当なんですか？」

課長「何を今更、という聞き方だね」

社員 A「よく言うじゃないですか、一週間に二日は休肝日を設けた方が良いって」

社員 B「そうですよ。毎日のように飲むなんて信じられないっすよ」

課長「毎日のよう、ではなくて毎日だ。365 日飲む」

社員 A,B「マジですか！！」

課長「マジもマジ大マジだ」

社員 B「毎日飲んでいて身体具合悪くならないんですか？」

課長「具合が悪くなるどころか、ますます快調。君たちのようにろくに酒も飲めんようじゃあ、良い仕事は出来んぞ」

社員 B「毎日酒を飲むことと仕事の業績に何か関係あるんっすか？」
（社員 A、B の脇腹をつつく）

課長「大いにあるね。酒は百薬の長、飲めば飲むほどアイディアが閃いてくるし、わけ隔てなく人と付き合いが出来
る」

社員 A「課長、毎日飲んでいては百薬の長にはなりませんよ」

社員 B「僕なんか、とても信じられないですね。酒飲むと頭が痛くなるし、眠くなるし、アイディアが閃くなんてことはありえないですね」

課長「問題はそこだ。君たちは中国の詩人で李白という人を知っているだろう。同時代の詩人の杜甫が詩に書いていることだが、李白は酒一斗詩百篇と言っている。飲む人間はみんなえらい、飲まない奴はクズとは言わないが良い仕事は出来ない」

社員 B「そんな無茶ですよ。天才と僕らを一緒にしないで下さい」

課長「君たちの事を言っているんじゃあない。いいか、良く聞けよ。アルコールは頭

の働きを活発にして、意識を拡大
してくれるんだ。普段発揮できない能力が酒を飲むことによって花開き、思ってもいないことを思いつくことがある。酒の効用はバカに出来ないんだぞ」

社員 B「それも程度の問題なんじゃないですか。課長のように毎日飲んだくれて家に帰って、翌日酒臭い息をして会社に出てくるような生活を続けていると、いつ具合が悪くなっても不思議じゃないっすよ」

課長「よく言ってくれるよなぁ。毎日飲みはするが毎日飲んだくれているわけじゃあないぞ。
　酒飲みはなぁ、休肝日なぞ必要じゃないんだ。いいか、私が知っている酒飲みで身体の健康のことを考えて、一切飲まなくなった人を知っているが、数年も経たずに他の病気で死んでしまった。そういう人は一人や二人ではない。酒飲みの肝臓は酒飲み用に出来ているんだ・・・」

社員 B「酒のために早死にした人たちの方がはるかに多いんじゃあないですか」

課長「まあ、私の話を良く聞け。毎日一升酒を飲むような人はこれは例外だ。間違いなく早死にする。問題は・・・」

社員 B「課長も同じようなものでしょう」

社員 A「（B に向かって小声で）言い過ぎるのは良くないぞ」

課長「バカ言え。俺は毎日飲むが一升酒をやるわけではない。そんなことをしていればとっくに会社を首になっている。

　俺が言いたいのはだな、昔鹿児島の方で世界一の長寿になった泉重千代というひげのじいさんがいただろう、あの人は、118 歳か何かで死ぬまで毎日焼酎を二合飲んでいたということだ。365 日毎日だぞ。焼酎二合というのは日本酒の三合四合に相当する。その人が 118 歳まで生きたんだ」

社員 A「そういう話は聞いたことがあります。でも、その方は得意な体質の持ち主だったのでは一」

課長「むろんそうだ。酒を飲まなくても 118 歳まで生きる人はまずいない。重千代さんは神様だ、天才だよ」

社員 B「課長、何を言いたいんですか？特異体質の人と一般の人を混同してもらっては困ります。

　専門医がよく新聞等に書いているじゃあありませんか。アルコールは一日ビール大瓶二本、酒二合、ウイスキーならロックで二杯位なら毎日でも結構、ただし、週に一日休肝日を設けるように、というのが大体の基準らしいですよ」

課長「君はろくに酒も飲めないくせによくそんなことを知っているなあ。だがなあ、そんな基準なんてクソ食らえだ。基準を出来るだけ少なめに見積もって責任を問われるのを避けているだけだ。

考えてもみなさいよ。それで満足出来る人は酒飲みでもなんでもない。酒を薬として嗜んでいるだけだ。酒飲みがそんな量で満足できるはずがない。酒飲みというのはある程度酔ったという感覚がなければ、杯を置くことは出来ないんだよ。そうして初めて酒を飲んだという気持になる」

社員 B「そうしてアル中になる、というコースですね」

課長「良いことを言うね君。だがな、肝臓はそんなヤワに出来ていない。例えば、毎日四合の日本酒を飲むとするか、そうすると肝臓はその量のアルコールを処理する態勢を整える。若干の無理を承知で一日の酒精を分解してくれる。

ところが、先ほども言ったように、突然飲酒を止めてしまうと肝臓は態勢が崩れ、酒精を処理するために総動員された酵素、その他の分解因子が逆に肝臓の攻撃に転じ、機能を減退させてしまう。そうして、本来持続できたはずの内臓の働きが阻害され命を縮めることになる。おそらくそういうことではないかな」

社員 A「話は面白いんですが、医学的根拠はあるんですか？」

課長「そこが問題なんだ。アルコール医学なんていい加減なもんだ。酒を二合飲むとほろ酔い、三合四合になると脚がふらつく、五合以上になると酩酊、歩くことも出来ないとかいった基準は、何の参考にもならない。

いいか、君らは酒の飲み方を知らないから、そんないい加減な基準を信じるかもしれないが、酒は、精神の状態で一合飲んだだけで酔うこともあるし、一升飲んでも酔っ払わないこともある。それは何故か・・・絶対的にアルコールが摂取されてい

るのに、何故極端に酔い方が違うのか、その辺りのことについて医学は何も説明していない。
　李白が一斗も酒を飲んでも脳髄が麻痺せずとうとうと詩を書き続けることが出来るのは何故か、その説明がないと俺は飲み続けるぞ」

社員 B「課長は飲むほどに雄弁になるのですね。驚いたなあ、まったく。でも何か詭弁のように聞こえるのですが一」

課長「詭弁だと？バカを言うな。私の直感を信用したまえ。飲まない奴は理詰めでくるから話にならん。いいから、さあ、一杯やれ。飲めば俺の話が分かるようになる」

社員 B「結構です。ちょっと用事がありますのでお先に失礼させていただきます」

課長「（社員 A に向かって）君も帰るのか？もう一杯やっていけばどうだ？」

社員 A「私も失礼します。課長、明日は一番で出張ですよ。飲み過ぎないようにお願いしますよ」

課長「（奥に向かって）おーい、熱燗二合徳利もう一本！」

初めてのお茶会

2008 年 9 月 28 日（日）

一昨日の 26 日（金）、お茶会の席というものに初めて出ることになった。

とは言っても正式のお茶会の席への招待ではない。

小生が主催する「刀道・文武両道塾」の塾生たちが参加するお茶の講習会、セミナーなのである。

現在私は文京区のスポーツセンターで「刀道」という実戦刀法を教授しているが、「文武両道塾」とあるとおり、武だけではなく文にも知識と造詣のある人間の養成を心がけて教えている。

中国の古の書物にある

「文事ある者は必ず武備あり。武備ある者は必ず文事あり」

という言葉を人間の究極の理想像に掲げ、武道に携わっている。

中国唐の時代の詩人李白は剣の達人であったということを、ある本（郭沫若『李白と杜甫』）で読んだことがある。

あの天下に名だたる酔いどれ詩人が剣を良くしたという記述に私はショックを受けたのであった。

大学時代から詩を書き始め、何冊もの詩集を出してきた私としとしては、まさに眼から鱗が落ちる思いだったわけである。本を読むまで剣と詩の両立に矛盾を感じ悩んできたのであったが、この本を読んで迷いが吹っ切れたのである。

そうして現在の私が今ここに在る。

当然のことながら修行途上の身であるが、書物や知見・映像での知識ではなく、実際に身を持って体験することによって、伝統文化のエッセンスの一部を垣間見ることが出来るのであり、そうした体験を積み重ねることによって、武道の精神がさらに奥深くなるはずだ、と私は信じている。

前置きが長くなったが（絶対に必要な前置きなのであるが）、念願のお茶会の実習を体験することが出来た。

講師は裏千家の安部宗麗先生。

場所は、杉並区「柏の宮公園」の林の中にぽつんと置かれた「林宮亭」と名付けられた茶室である。

これがただの茶室ではない。

江戸時代初期の大老酒井忠勝が若狭小浜藩の城主であったころ建てられた上屋敷の茶室をそのまま移し変えたと言われる由緒ある茶室なのである。

それだけでは手狭なので、移築に当たって六畳間が付け加えられたが、写真で

見られるとおり、実に簡素で質素な武家風の茶庵なのである。

全くの素人集団がそうした本格的な茶室を使用できるということそのものが幸運であったといわざるを得ない。

先生を入れて 11 名の参加であったのだが、茶室の規模にぴたりと当てはまっていた。

こうした講習の常として、本来ならお点前をいただいて若干の説明を聞き、それで終わりにおなるところなのであるが、進取気鋭の先生の発案で、それぞれがお

正客となり、また立場を変えて亭主になりお茶を立てるということまで体験させてもらった。

　初めてのお茶会参加としては、破格のことという他はない。

　それぞれ緊張しぎこちなくお茶碗を手にしていた塾生も慣れるに従って動きがスムーズになってくるのが見ていて分かった。

ただし、いくら武道をやっていても座布団の無い畳で長時間正座していることは苦痛なのであったが、先生が見ていない隙に膝を立てたり立ち上がったりして、苦痛を軽減するコツ（カニングのコツ！）を会得することもできた。

先生が見ていない間の一瞬

フランス人の塾生が参加していて、当然のことながら数分しか正座することが出来ず、座布団を尻に敷いてどうにかやり過ごしていたが、それでもやはり長くは持たない。

同席していた彼の奥さんが私に耳打ちしてくれたことによると、

「どうして日本人はこういうことに耐えることが出来るのだろう？」

と抗議の意を込めて呟いていたそうである。

しかし、彼も教えられたとおりの作法で、何とかお手前を点ずることが出来、終わって次室に下がったとき、思わず「やった！」と叫んでこぶしを突き上げるのを見た。

その表情が晴れがましく輝いているのを見ていて、彼にとって大きな大きな体験であったことを私は確認することが出来た気がする。

膝をがくがくさせながらの二時間半があっという間に過ぎた。

　参加者の大半が酒飲みなのであるから、何度も生菓子を食べることになってあたかも我慢比べであったが、終了後に予約していた和風レストランでの酒は、また別の場所に収まったようなのである。

安部先生

高橋義夫著『密命』読後感想

<< 作成日時 : 2008/10/03 22:36 >>

2008 年 10 月 3 日

乱読家である私は、例によって図書館で見境無く本を選んでいてこの本を手に取りパラパラと頁をめくっていると、小笠原玄信斎（源信斎）という固有名詞が眼に飛び込んできた。

「えっ、何これぇ～！」というのが正直な感想である。

というのも、この人物は日本剣術史上に名高い達人だからである。

戦国時代の人で、上泉伊勢守の新陰流を受け継ぎ、後に真新陰流という流派を起こした。

中国に渡って戈（ほこ）の術を収め、八寸の延曲（のべがね）という技を会得して一躍名を挙げ、当時の剣術界で海内無双といわれた。

剣聖とうたわれた師匠の上泉伊勢守でもその技を防ぐことは出来なかったであろ

う、といわれるほどの秘術であった。晩年には三千人もの弟子を擁していたという。

偶然に手にした小説本の主人公が小笠原玄信斎ということを見つけて感歎の声を発したのには三つの理由がある。

その一つは、剣術史上名高い人物であるにも関わらず、小説の主人公となった例を他に知らないということ。

その二は、私が日本剣術史上最強の剣客と信じて疑わない無住心剣術の祖針ヶ谷夕雲（せきうん）の師匠であるということ(小生に『夕雲開眼』と題する短編小説あり。HP「佐土原台介の世界」参照）。

その三は（これこそがこの記事の主題となるものである）、玄信斎が主人公である以上「八寸の延曲」という謎の技についての説明があるのではないか、という期待感を抱いたからである。

私はあまたの剣道史、剣術書を読み漁ってきたが、史上有名な「八寸の延曲」という技について明確な説明に出会ったことはない。

ただ一書、今は亡き作家にして武道家（武道研究家）であった戸部新十郎氏の武道研究の集大成とでもいうべき名著『兵法秘伝考』（平成七年　新人物往来社）に、「八寸の延曲」という項目をわざわざ設けて、技の具体的な解説を試みようとしている。

しかしながら、結局は型の示唆はあるものの技を特定することは避けている。古書にも技の解説が一切記されていないからである。

ただ、戈の術を収めてきたのであるからそれに関わりがあるのであろう、という推

測が一般的であるのに対し、戸部は、関連する様々な古書の記述に触れながら、つまりは間合を重視した剣術の技であろう、とほぼ断定的に述べている。

ただし具体的にはどうな技なのかということに対しては回答がない。

そこで本書である。

選りにも選って玄信斎を主人公に選んだからには、作者が発見あるいは解明した「八寸の延曲」についての記述があるはずだという期待はいやがうえにも高まり、私は380頁に達する小説の世界の住人となった。

とはいえ、その箇所の記述にいつ出会えるのかという気持ちが常に先行して、正直なところ飛ばし読みをした箇所もある。

本の題名の「密命」というのは、家康の時代、関ヶ原の決戦に破れた豊臣方の遺臣が、フィリピン呂宋（ルソン）島に集結して徳川を倒す反乱を起こそうとしているとの情報を得た幕府が、正確な情報を得るために、武道の達人である玄信斎を呂宋に送り込むことを指している。

入道姿の玄信斎が随所に武道の達人振りを発揮するシーンがあり、この小説の見所の一つとなっている。

活躍の場は呂宋での出来事が大半を占めており、後半澳門（マカオ）を経由して中国本土に渡り、終盤十数頁を残すのみとなったところで、いよいよ「八寸の延曲」の術を使う相手が登場する。

相手は以外にも倭寇崩れの日本の武士なのである。その箇所にはこうある。

「ディオゴ・庄右衛門の左肩が一瞬わずかに動いた。身体が沈んだ。裂帛の気合とともに腰のあたりから光芒が走り、白刃そのものが、四尺ほどにも伸びたかに見えた。」

この術こそが「八寸の延曲」なのである（作中では「飛刀勢」と名付けられている）。

具体的にはどのようなものか。

「ディエゴ・庄右衛門は左手で脇差を抜きざま、手首の動きだけで敵に投げつけ、片手に持った大刀で突いたのである。その一連の動きが目にもとまらぬ迅さだったので、二尺八寸の刀が四尺にも伸びたように見えた。」

と作者は書く。玄信斎はどのようにしてその必殺技を破ったかというと、

「その動きを一瞬に見破り、飛来する脇差を素手で払ったのである。」

そうして相手の大刀が自身に届く前に素早く相手を刺した、というわけである。

なるほど、と私は思う。

曲（かね）というのは曲尺すなわち矩（かね）でもあり、刀が八寸伸びるということである。それを作者は脇差の投擲として捉えたわけである。

確かに、目にも留まらぬ速さで脇差を抜いてそれを投げつけ同時に大刀を突き出せば、避けることは不可能と思えるほどである。

瞬時にその動作が出来るのであれば、上泉伊勢守でも避けることは出来ないかもしれない。

しかし、である。脇差の柄をもともと左手で握っていて瞬時に抜くことは可能であるが、二刀流でない限り両手で握った大刀から左手を離し、脇差の柄に手を掛ける動作は大きな隙となる。

ひとかどの相手がその隙を逃すはずはない。

剣術をよく知る者にとっては子供だましの術である。作者はよく考えたつもりであろうがその破綻は大きすぎる。

「八寸の延曲」はいまだ終に未解明である。この術の解明（ないしは新たな解釈）は、現代にあってもなお我々剣術修行者にとっては魅力のある課題なのである。

創美流華道拝見

<< 作成日時 : 2008/10/17 23:08 >>

2008 年 10 月 17 日

去る 13 日刀道仲間の竹内臣也五段に誘われて、創美流華道家元で行われている第 81 回華道展を観に行った。

竹内さんはかねてより、家元の渡邊華靖（わたなべかせい）氏と知己であるとのことで、日本人を代表するような人物であり、大変面白い人なので、ぜひ私を紹介したいと言ってくれたのである。

場所は東久留米市の住宅街にある由緒のありそうな屋敷である。家元の屋敷内で展示が行われているのは珍しいことであるが、味も素っ気も無い会館などで行われるよりはるかに風情と情緒が増す。

着物を着た受付の女性に案内されるままに二階に上がり、展示作品を一通り見て回る。

私は創美流の作品を見るのは初めてであり、予備知識は全く無いのであるが、ざっと見て回った印象では、前衛的な作品が多く、草月流に近い印象を持った。

とはいえ、草月流のようにかっとんでいるわけではなく、生花との調和を限りなく尊重しているふうが見え、人工物を用いながらもむしろ自然というものの本質を明るく照らし出してみた、といった感じなのである。

全体が華やかで生き生きとしており、展示されている日本間がぱっと明るく輝いている。

この印象は、挨拶に出てこられた家元の印象に重なる。まだ 40 歳台の若さである。

華靖氏は先代が亡くなるまで神主を勤めておられ、先代没後家元を継がれたとのことである。

創美流派 250 年の伝統を有する古流派であるから、草月流などはむしろ遥かな後進に過ぎず、実際は、草月流が創美流に近いというべきなのである。

ただ、草月流が世間には抜きん出て有名なのでその印象と比べざるをえないという事情があり、冒頭の感想となった次第である。

家元は大変気さくな人で、私が剣術修行者として紹介されると、刀の話から始まり剣道に話題が進み、現代日本人が納めなければならない三要素として、剣道、茶道、華道の三つを挙げられた。

五人の子供さんがいて、高校三年生を長男とする三人の男の子は全員剣道場に通っているとのことである。

自説を実践されているわけである。

そうして、日本の政治状況にまで話題が広がり、現代日本人が伝統芸能を習得する環境が整えられてないと嘆じ、それをやろうとすれば全て持ち出しとなり、よほどの金持ちや大流派ではない限り、表現に著しい制約を受けなおかつ萎縮していかざるを得ない、と憤懣を隠さない。

その通りであり、私たちは深くうなずいて家元の説に賛同した。

座布団を頂いて正座していたのであるが、30 分を過ぎた辺りから脚が痺れてくるのを感じ始めた。

隣の竹内さんももぞもぞと膝を動かしている。家元はすずしい顔をして扇子を片

手に持ち端然として正座したまま、向かいに座る私たちに怒涛のように自説を開陳する。

ここが我慢のしどころであり、私も正座姿を崩さず涼しい顔を装って話を聞いた。

一時間ほど座っていたが何とか持ちこたえ、丁重に御もてなしの礼を述べてお家を辞した。

夕刻にはまだ間があったが、二人で国分寺の駅前の居酒屋に潜り込み、一献傾けつつ政治、世相、芸術、刀道などについて親しく語り合ったわけなのであった。

気分が優しくほどける中秋の一日であったというべきであろう。

山本兼一著『狂い咲き正宗』読後感想

2008 年 11 月 18 日

この本は今年 8 月 20 日発行（講談社）の出来上がったばかりの熱々の本である。

図書館にリクエストして取り寄せてもらった。

数年前発刊された同じ著者の『いっしん虎徹』という本を読み、注目していたところに表題の本の広告が出たので、図書館にお願いしたのである。

『いっしん虎徹」はいうまでもなくかの有名な長曽祢興里入道虎徹の伝記小説であり、虎徹の生涯の出来事ばかりでなく、刀剣鍛造にまつわる知識が豊富に書き込まれていて随分と勉強させてもらった。

その作者が、「正宗」の名を表題とした本を新しく出したのであるから飛びつかないはづはない。

当然正宗という刀剣史上最も有名な刀匠についての謎に迫る作品かと意気込んだのであるが、副題に「刀剣商ちょうじ屋光三郎」とある一文の意味に思い及ばなかったのである。

表題はちょうじ屋光三郎という刀屋を主人公とした短編連作の一タイトルに過ぎなかったのである。

七つの短編に分かれており、それぞれ次の表題が付けられている。

「狂い咲き正宗」

「心中むらくも村正」

「酒しぶき清麿」

「康継あおい慕情」

「うわき国広」

「浪花みやげ助広」

「だいきち虎徹」

以上七編である。

主人公の刀剣商光三郎というのは当然町人であるが、元々は旗本七百石御腰物（おこしもの）奉行黒沢勝義の跡取り息子であり、暦とした武士なのであったが、奉行の父と正宗の存在を巡って対立し、家を飛び出して刀屋となった。

御腰物奉行というのは、作者によると

「将軍の佩刀はもとより、大名に下賜する刀剣、あるいは、大名から献上された刀

剣をあつかい、刀の試し切りや、拵えの彫金にまで目を光らせている。」
という、刀好きの人間にとっては長嘆息して羨むような立場にいる人なのである。
　従って生まれついての刀好きの光三郎（黒沢勝光）は天下のありとあらゆる名刀を直に見てきたのであり、そうして養われた鑑識眼は寸分の狂いもなく、茎（なかご）を開くことなく刀身を間直に見ただけで即座に作者名を言い当ててしまう。

　根っからの刀好きだけに、煩わしい武士の身分などいささかの未練もなく、刀屋になったことをむしろ喜んでいるわけなのである。
　光三郎は、実は四谷伊賀町に住む名工として評判の高い山浦清麿の工房に出入りしており、時に鍛刀の手伝いなどしている。ここまでが各編に共通する物語の前提である。

　それでは、各編の説明に移ることにしよう。

「第一編「狂い咲き正宗」。
　いまでは息子が跡取りになることを諦めた父の勝義が、光三郎の店を訪ねてくるところから話は始まる。
　用件は、将軍家から預かっている本庄正宗を故あって試し切りしたところ、一尺余りを残したところからポキリと折れてしまったというのである。
　もしそのことが露見すれば、父勝光は当然のことながら切腹してお詫びしなければならない。そこで何とかそれに替わる正宗を見つけて欲しいという懇願にも似た頼みなのである。

光三郎は五千両でその頼みを引き受ける。その法外な値に勝義は絶句するが、命には代えられない。

ミステリー仕立てであるので、それからは本を読んでもらうしかない。

第二編「心中むらくも村正」。

御腰物奉行黒沢勝義の配下に、村正の脇差を腰にしている者がいた。

村正は徳川家に祟る妖刀とされており、所持することは御法度であり、ましてやそれを腰にするというのは、将軍家に対して謀反の意志があるということになる。

勝義はとりあえずその配下を押し込めておいて、光三郎に相談を持ちかける。

調べてゆくうちに、その脇差と、押し込められている配下が懇意にする吉原の花魁（おいらん）が関係しているらしい。光三郎は恋女房の激しい嫉妬に悩まされながら吉原に通いつめる。

その間の経緯については、やはり本を読んでもらうしかないのである。

結論は表題が示唆している。

第三篇「酒しぶき清麿」。

光三郎が師匠と頼む清麿は、酒ばかり食らっていて一向に刀を鍛える様子がない。

稀代の名工にぜひ鍛刀してもらいたいとの一心から、なだめすかし鍛錬の槌を振ってもらおうとするのだが、取り合ってくれない。

光三郎がふと思いついたことは、ついこの春まで清麿といっしょに暮らしていて行方知れずになったたおとくという女性の存在である。光三郎の涙ぐましいばかりの努力が始まる。

第四篇「康継あおい慕情」。

康継というのは、家康から茎（なかご）に葵の御紋を切ることを許された初代越前康継のことである。

南蛮鉄を鍛えて作刀したことで広く知られている。

その初代康継が売りに出された。

御腰物奉行勝義が、」さる旗本から売却を依頼されたのである。「康継は人気があるが、それでも正宗や長光ほどの高値で売れるわけではない。」

しかし、茎（なかご）を見て、関係者は腰を抜かすほど驚いた。銘には、家康と二代秀忠の両御所から、葵の紋と康の字を貰ったときの記念にこの刀を鍛えた、という意味の言葉が彫ってあったからだ。

そうなると、百両や二百両の値にはなる。しかし売主は五百両で売って欲しいという。その値段になると途端に取引は難しくなってくる。

刀が本物であることに間違いはないのであるが、売買に関してはあるからくりが絡んでいた。光三郎のからくり解明の暗躍が開始される。

第五編「うわさ国広」。

国広というのは、桃山時代から江戸期にかかる頃に活躍した堀川国広のことである。

元は日向の武士であったが刀鍛冶となり、江戸時代初期京都の堀川べりに居を構えたのでそう呼ばれている。　「国広の刀は美しいうえ、切れ味がよく大業物として認められている。」

二人の大の仲良しの大身旗本がいて、一人は国広の刀ばかりを集め、一人は

虎徹ばかりを集めている。

二人は約定を交わしていて、国広集めが虎徹を手に入れれば、必ず虎徹集めに連絡し、それを引き取ってもらう。 その反対も同じことをする。

ところがである。

もしどちらかが相手に渡すべき刀を秘蔵していたことがばれたとしたら、何が起こるか。

単なる決闘とかでは済まない結末が用意されている。

第六篇「浪花（なにわ）みやげ助広」。

助広は初代と二代が特に有名で、濤乱（とうらん）刀という独特の刃紋を顕して名を馳せた。

刃紋が大きく鎬近くまで波のようにうねっていて豪壮かつ明快である。なおかつ切れ味が良い。

初代はソボロ助広とも呼ばれ、二代は津田越前守助広と銘を切り、二代目の方が人気がある。

この篇では、二代目が対象となっている。

物語の発端は、ある浪人者が、十振りもの助広を刀屋光三郎の下に運び込んだことから始まる。

その全てが箸に棒にもかからない全くの偽物であることを光三郎はたちまちのうちに見抜いてしまう。

浪人が言うには、浅草のある刀屋で見事な助広の一振りを見せられ、すっかり魅了されてしまった。浪人は大阪に旅をすることになっていたのであるが、刀屋の主人は、この刀の姿形をよく憶えていて、大阪に行ったとき刀屋でその刀を見つけた

ら一振り五十両で買います、と言ってくれたのだという。

果たして、浪人は首尾よく大阪の刀屋で助広を何振りも見つけ、なけなしの金をはたいて五、六振りも買い求め、喜び勇んで江戸へ帰りくだんの刀屋に持ち込んだところ、すべて偽物であると言われ死ぬほど落ち込んでしまう。　その話を聞いた光三郎は、そこには何か裏があると直感し、調査を始める。

第七編「だいきち虎徹」。

ここに今までほとんど知られることがなかった剣相家という者が登場する。

鑑定家とは違い、刀身の仔細を点検し、刃紋、細かい傷、全体の姿等を検分して吉凶を占う専門家である。鑑定家にとっては何の問題も無い素晴らしい刀であっても、剣相家の鑑定では、持ち主に災いをもたらす凶刀になってしまうと言うことが起こるのである。

持ち主は、いくら気に入っている業物とはいえ、不吉な相の出た刀は出来れば持ちたくない。

そこで、剣相家の鑑定に従って売りに出された銘刀はどのような運命をたどるのか。

光三郎はそのからくりと謎に迫る。

以上が、各篇のあらましである。

文章が長くなったのは、刀と武道を愛する余りの私の情熱のなせる業であり、大部の文章を読むことになった読者に、お疲れさんと申し述べたい。

大沢在昌著『魔物』上下読後感想

<< 作成日時 : 2008/10/24 15:15 >>

2008年10月24日

この本は昨年11月角川書店から発行されているので、新しい部類に属する。

最も最近新刊が出たと言う新聞広告を読んだ(書名失念!)ので、着実に出版している様子である。

近々にこの本も図書館で買ってもらおー。

大沢は、このところ意表を突くテーマを用いることが多い。脳髄移植とか、近未来の東京とかである。

今回も宗教という大問題に挑戦した。

とはいっても、ドストエフスキィーのように真っ向から神の問題を取り上げるのではなく、いわゆる搦め手から、宗教とは何かと問いかけている。

回答は必ずしも明快ではないが(神は実在するか、といった大問題に明快な解答は不可能である)、副主人公ともいうべき作中のロシア人女性や同僚の捜査官

の口を借りて、作者が考えうる限りの思索の結果を語らせている。

それは後に紹介することにしよう。

何はともあれ、書名となっている「魔物」に取り掛からなければならないのだから。

物語の発端は、ロシア正教の信仰になくてはならないあるイコン（聖人を描いた宗教画）が、特定の期日（うるう年の２月２９日）までに海底奥深く沈められるはずであったのに、ロシアマフィアの抗争絡みで深海へ沈められることなく、マフィアの一員によって北海道へ運び込まれる、ということから始まる。

ロックマンというその殺し屋は、麻薬取引のために日本へやって来たのであるが、主人公である麻薬取締官の大塚たちの察知するところとなり、現場を急襲されて銃撃戦になる。

取引は失敗したがロックマンは逃げ失せる。

取引に関わった側は、別の大組織暴力団のチクリがあったのではないかとかんぐり、その幹部たちが飲みに来ているクラブに押しかけ銃を乱射する。

むろん、ロックマンがその先頭に立っている。彼は近寄る人間を恐ろしい力で投げ飛ばし、何発もの銃弾を受けているのにひるむことなく、高森という大幹部に迫ってゆく。

（その姿を目撃したロシア人のホステス、ジャンナによると、ロックマンの睫毛が異様に長くなおかつ目を閉じているようにみえたという。）

さらに何発かの銃弾を受けたロックマンは、テーブルの下に隠れて銃を構える高

森をじっと見据えた後、急に力が抜けたようになりそこに倒れて絶命する。

だが、意外なことが検視の結果で判明する。

実はその数日前、ロックマンを追いかけていた大塚が、ある場所で彼を追い詰め拳銃を発射する。何発か命中し最後の一発は頭部に当たったのに、ロックマンは一滴の血も流さずまた倒れることもなく逃げ失せてしまった、ということがあった。
何故頭を撃ち抜かれたのに死にもせず血を流すこともなかったのか、それが大塚にとっての謎であり、当然のことながら、その事実を捜査関係者の誰も信じてはくれなかったのであったが、検視の結果、確かに大塚が使った銃の弾がロックマンの体内に残っており頭部を貫通した跡もあったことが確かめられ、周囲の人たちもやっと大塚が言ったことが本当であったことを知る。

そこからが本題となる。

ロックマンが小樽港に降り立つとき小脇に抱えていた30センチ四方ほどの額縁のようなものは一体何なのか、ということが問題となる。麻薬捜査官はロシアマフィアの実態を調べてゆくうちに、数日前ウラジオストックでマフィアの抗争で人が銃で殺された、という報道を確認する。
そのとき殺された人物が持っていたイコンが持ち去られたということを、それを委託した司祭が名乗り出て、取り返さなければ大変なことが起きる、と訴えているという。

大塚は、ロックマンが持っていたのはそのイコンであることを確信し、仲良くなったかつてのホステス、ジャンナに司祭と連絡を取り合うよう依頼する。

ジャンナは、インターネットカフェに入り浸り司祭と連絡を取り合い、ついにイコンの正体を知る。

イコンに描かれているのは、カシアンという聖人で、司祭が管轄する教会に百年前から掲げられているのであるが、問題は、

「カシアンは聖人でありながら、魔の世界とつながりをもっている。地獄で悪魔の召使に毎日、ハンマーで叩かれている。それをされずに地上にでるのを許されるのが、四年に一度の二月二十九日。その日、カシアンは街をさまよい歩き、人々に災いを与える。ときには、人にとりつき、その人に災いをなさせる。とりつかれた者は皆、カシアンと同じ災いの目のもち主となり、それを隠すために睫毛を長くのばす」(上巻 254 頁)、そのことである。

そうして、「古い記録によれば、カシアンにとりついた者が生命を終えるとき、悪い心をもつ者を探すという。だから正しき心をもつ者ばかりなら、誰にとりつくことのできずにイコンに戻る他ない」(同 259 頁)。

こうして、ロックマンは邪心と憎しみをたんまりと抱え込んだ暴力団の北海道本部長高森にのりうつった。

その後に起こる高森の異様で凶暴な行動に捜査当局は振り回されるが、ジャンナと共にカシアンの秘密を確信した大塚の話を、誰も信じる者はいない。

しかし同様の事件が度々繰り返されるに及んで、捜査に関わる人たちも疑心半

疑ながらも、事の真相に想いを馳せるようになる。

しかし、本当にこのようなことがあるのだろうか？もしあるのだとしたら神の存在を信じなければならない。であるなら、何故神は人類の邪悪な行動を許しているのだろうか？何故、悪人をはびこらせ善人を苦しめるのだろうか？

大塚の同僚の捜査官加瀬は言う。
「神が実在するかどうか、客観的に答えられる人間はいない。信仰をもつ者にとっては実在するし、またそうあってくれと願う。神は実在するとしても、信じていない人間の前には決して姿を現さない」（下巻 241 頁）。

「本当に神さまはいるのかい」
とたずねる大塚に対して、ジャンナは答える。

「います。神さまは、信じる者の前には、いつか必ず姿を現します。それもその人が一番苦しいとき。それまでは、神さまはただ見守っているのです」（下 177 頁）。

カシアンは、最後に、大塚がその憎しみを決して忘れることがなかった生まれついての犯罪者とみなす中学時代の同級生飯田にとりつく。
飯田は、自分を憎む大塚にとりつこうとする。そのことを大塚は予感しており、もしそうした場面に遭遇することになったら、災いを自分で断ち切るために自分で自分を撃つことを心に誓う。
ジャンナは必死でそれを止めようとするが、ついにその場面がやってくる。

大塚や同僚の銃弾を何発も身に受けながらも、不死身で近づいてきた飯田ににらまれた大塚は、自分が瞬間jカシアンになったことを悟り、自ら口の中に差し入れた銃の引き金を引く。

・・・・大塚は死ななかった。 偶然にも弾は不発だったのだ！

その瞬間飯田は絶命し、カシアンは大塚の身体の中から抜け出してゆき、イコンに戻った。

メデタシメデタシ。

イコンは日本にやって来た司祭の手にしっかりと抱えられ、ウラジオストックへの帰りの船から、重い鎖で巻かれて海中に投じられる予定である。

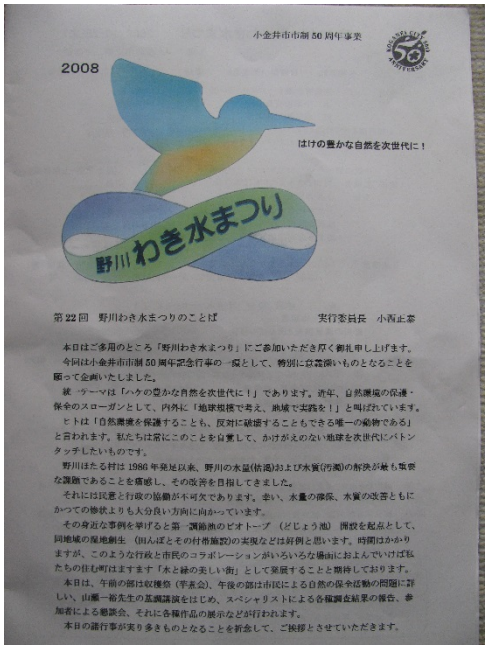
カシアンは永久にその活動を封じられた。しかし、

「魔物」と呼ばれたカシアンよりはるかに恐い魔物が、悪魔が、この地球上に存在する。それは・・・・・・?

野川　わき水まつり」四方祓い

<<　作成日時 ： 2008/10/31 15:54　>>

２００８年１０月２５日



小金井市市制 50 周年事業

2008

はけの豊かな自然を次世代に！

野川わき水まつり

第 22 回　野川わき水まつりのことば　　実行委員長　小西正泰

本日はご多用のところ「野川わき水まつり」にご参加いただき厚く御礼申し上げます。

今回は小金井市市制 50 周年記念行事の一環として、特別に意義深いものとなることを願って企画いたしました。

統一テーマは「ハケの豊かな自然を次世代に！」であります。近年、自然環境の保護・保全のスローガンとして、内外に「地球規模で考え、地域で実践を！」と唱ばれています。

ヒトは「自然環境を保護することも、反対に破壊することもできる唯一の動物である」と言われます。私たちは常にこのことを自覚して、かけがえのない地球を次世代にバトンタッチしたいものです。

野川ほたる村は 1986 年発足以来、野川の水量(枯渇)および水質(汚濁)の解決が最も緊密な課題であることを痛感し、その改善を目指してきました。

それには民意と行政の協働が不可欠であります。幸い、水量の確保、水質の改善ともにかつての惨状よりも大分良い方向に向かっています。

その身近な事例を挙げると第一調節池のビオトープ（どじょう池）開設を起点として、同地域の湿地創生（田んぼとその付帯施設）の実現などは好例と思います。時間はかかりますが、このような行政と市民のコラボレーションがいろいろな場面におよんでいけば私たちの住む町はますます「水と緑の美しい街」として発展することと期待しております。

本日は、午前の部は収穫祭（学衣会）、午後の部は市民による自然の保全活動の問題に詳しい、山崎一裕先生の基調講演をはじめ、スペシャリストによる各種調査結果の報告、参加者による懇談会、それに各種作品の展示などが行われます。

本日の諸行事が実り多きものとなることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

「野川わき水まつり」（野川ほたる村主催）は、今年で22回目である。

私は今杉並区に住んでいるが、小金井市に住んでいたとき縁があり、ほたる村の会員となった（１５年ほど前）。

ほたる村は当初、名のとおり野川にほたるを居つかせようという運動体として発足し、ほたるが生息可能な野川の環境整備に力を注ぐことから始まった。

従って初代村長は昆虫学者の小西正泰先生（小金井市在住）であったのは必然の成り行きである。

野川の良好な自然環境を保持しようとする運動は、やがて野川に水量を提供してきた崖線（豊かな湧水をもたらしてきた通称はけの道と呼ばれる野川沿いの丘陵）

を保護する運動に発展し、今では小金井市及びその周辺の自然を守る大きな運動体に発展しつつある。

私と妻は会費だけはきちんと払いつつも実質的には野次馬会員で、運動の実行には深く関わることは出来なかったが、刀道をやっていた関係で、刀剣に造詣の深い事務局長の彦坂和夫氏（現村長）の要請により、「わき水まつり」などのときに刀による四方祓いという行事を執り行うことで、かろうじて会員の端くれとして参加することが出来たのである。

これまで二度四方祓いを執り行ってきた。
まつりの主会場となるしかるべき場所に陰陽道に則った方角に沿って結界を作り、その四方に巻き藁ないし笹の付いた青竹を立て（そこに邪鬼、悪鬼、悪霊が取り付く）、邪鬼悪鬼悪霊退散の、唱え事をしながら立てられた藁ないし竹を、様々な刀法を駆使しながら刀で切ってゆくのである。

剣術の各古流派にはそれぞれが制定した四方祓いがあり、もちろん刀道にも独自の方法がある。
しかし、ほたる村の行事では、私はあえてその場にふさわしい独自の方法を考案し実行してきた。

今回は、ほたる村が作付けしてきた稲とサツマイモが見事に実を結びその収穫祭をかねているので、そのための称え事をしなければならない。私と会員の方々によって公有の竹林から切り出して運んできた四本の青竹を、玄関横の祭壇前に木のベンチに釘付けするという形で固定し四角形の結界を作った。

上に高く笹をつけた竹の太さは、直径3センチ～4センチといったところである。私が主催する文武両道塾の塾生も三人来てくれ作業を手伝ってくれた。

いよいよ行事開始。

関係者の挨拶の後、行事に携わった中学校の園芸部の生徒たちによって収穫物が祭壇に運ばれ、真剣の脇差しと鉄扇を帯し白の制定胴衣をまとった小生の登場である。

結界に入る前に、見物の人たちに対して、四方祓いとはどういうものかを説明する。

「エー、皆さんにですね、四方祓いとはどういうものかを少し説明させていただきます。

これは古代から我国で執り行われている行事でして、戦の前とか、柵やお城の造

築に際して執り行われたといわれています。

また、方角にはそれぞれ名と地形が定められていて、南は朱雀、これは沃地を意味します。東は青竜、これは流水を意味します。北は玄武、これは丘陵ですね。西は白虎、これは大道ということです。

平安京は、正確にこの方角に沿って造営されたと記録にあるそうです。

それぞれの方角に立てられた竹には、方角にまつわる邪鬼悪鬼が取り付いているので、それらを一刀両断してゆくのですが、本来は、鍛ち下ろしたばかりの真新しい刀で行われるべきなのですが、貧乏な私にとって、その都度新しい刀を持ってくることはできませんから、普段道場で藁斬りに使っている使い古した刀で勘弁していただくことにします」

と挨拶。

そうして、刀を右手に捧げて結界の内に入り、刀礼。

正確に東西南北の方角に立てられた方位の内、まず正面に当たる南に位置する竹に向かう。

「正面南の方角朱雀に向かう。遠くにたわわに作物が実った一面の緑野が見渡せる。だが天候不順、洪水、旱魃などにより、作物の全滅ということが起こりうる。それらの基をなす邪鬼悪鬼悪霊を、斬る！」

　と声高に称え、刀を抜いて左袈裟切り。両断された竹の先端がすとんと地面に落ちてくる。

　刀を正眼に構えたまま向きを変える。

「東の方角青竜に向かう。清く豊かに流れ出る湧水、野川の流れがある。日照りや洪水、人の手が加えられことによる渇水、生活排水の流入によって、清き豊かな流れが阻害される。それらの凶事を束ねる邪鬼悪鬼悪霊を、斬る！」

　と称え、まず突きを入れ、今度は右袈裟切り。これも成功。
　さらに反時計回り左へ。

「北の方角玄武に向かう。行く手に湧水を含んだ豊かな丘陵が見える。だが、そこには丘を削り谷を埋め、粗製乱造のマンションや住宅を分譲する拝金主義の悪徳業者が跳梁する姿が見え隠れする。それら業者の心に巣くう邪鬼悪鬼悪霊を、斬る！」

　と称え、まず左袈裟、落ちてくる残りの竹を右袈裟に連続切りしようとしたが、落ちてくる竹が傾いたため右袈裟を失敗。そのまま正眼に構えて左回転。
　失敗の動揺を抑えようとしたまま、

「西の方角白虎に向かう。そこには大道すなわち大通りが見える。道の両脇には商店街が並び、買い物客で賑わっている。しかしながら、そこには様々な欲望と思惑が渦巻いており、脅し、強請り、略奪、暴走、暴行が横行している。それらを陰で支配する邪鬼悪鬼悪霊を、斬る！」

と称えざま左逆袈裟に切り上げるが、刃は竹の途中で止まってしまう。静かに引き抜いて同じ箇所を左袈裟切り。

ばさりと上から葉付きの残りが落ちてくる。

失敗はあったものの四隅の竹全てを両断。取り付いた儒邪鬼悪鬼悪霊を退治する。

儀式は無事終了した。

着替えを済ませ、塾生たちと共に収穫の芋煮汁をいただく。

午後からも行事は続き市長なども見える予定らしいが、明日は、刀道の全国大会を控えており、村長の彦坂さんに挨拶して塾生と共に会場を後にした。

第二十一回刀道全国大会

<< 作成日時 : 2008/11/03 00:05 >>

2008年11月2日

去る10月28日日曜日、日野市の東京至誠館道場で、全日本刀道連盟主催の全国大会が開催されました。

去年は20回記念大会ということで、高幡不動尊五重塔下の広場で行われ、20団体もの武道家が出演され、大盛況を博した次第ですが、今年もそれに劣らぬ盛況でした。

何といってもうちの本部道場は、町道場としては日本一の広さを誇り、設備も完備しているという恵まれた環境を有しているわけです。

広さは百畳を優に超えるのですよ。

後に写真でその規模が明らかになりますが、そういった場所で稽古ができる私たちは、シアワセモノというほかありません。

さて、前置きはこれくらいにして、当日の状況をレポートしましょう。

１０時から始まった大会は、まず個人戦からスタートしました。

初二段、三四段、五段以上の部と三段階に別れ、それぞれの部で優劣を競います。

他の流派はいざ知らず、我が刀道では体転（体捌き、体の瞬時の移動）ということを最も重視します。

つまり、前に立てられている藁は、巻き締めて水に濡らした畳表ではなく、生きた敵なのです。

むろん、巻き藁が生きているわけではないのですが、それを生きた敵とみなし、「敵」の攻撃をかわしつつ反撃に移るという動作を取ります。

参加団体のほとんどは抜刀道系なので、目の前の藁は動くことのない単なる物体に過ぎません。

従って自分は目の前の藁を絶ち斬るということに集中すればよいわけです。

これは据え物斬りといって、古来より刀の切れ味を試す方法として行われてきました。

しかし、現代、抜刀道が居合道に並ぶほどに盛んになってきて、本来据え物斬り

を一切やらなかった居合の流派が、同じことを始めたのです！

このことは、刀術の一大変化とでも言うべきものでしょう。

巻き藁が自由自在に斬れるというのが、現代刀術の主流となったというわけです。

むろん、試斬をやらない流派はたくさんあるのでしょうが、世の耳目を引くためには、派手なパフォーマンスが必要になってきます。刀術では何本もの巻き藁を束ねて斬るのがその趣旨に適うということです。

私たち刀道では、本来は確実な体転を行って敵の攻撃を捌く形がきちんと出来ていれば、斬れた斬れないは二の次だったはずですが、やはり、斬れないよりも斬れたほうが見栄えが良いということもあって、当流の刀法が多少崩れたものになっていても、確実に斬れた方を勝ちとするということになっています。

今大会で小生も審判を勤めましたが、上記に述べた基準を採用しました。おそらく、その基準を見直すということは、時流からいって在り得ないことのように思われます。

しかし、もう一度刀道はどちらの基準に軸足を掛けるのか、ということを議論すべきとき来ているように思います。

とはいっても、団体戦などで、当流が定めた斬り方で見事に二本の藁を両断する抜刀道の流派の人たちの技量は、見るべきものがあります。

何よりも、重ねてきた修練の成果が如実に現れています。

私たち刀道も斬ることを主流に稽古を重ねているわけですから、彼らと遜色のない試斬術を身に付けてしかるべきなのですが、彼らの見事な試斬術にいつも後れを取り、団体戦で優勝することはほとんどありません。

何故でしょうか？

そのための練習をしないからです。

小生もその一人であり、抜刀道の人たちが、いとも軽々とやってのける二本立ての水平斬りに失敗することが多いのです。

体転を用いての多彩な刀術を極めるというのが小生の究極の目標ではありますが、大会に出る以上確実に斬れなくては正確な技量の持ち主とは言えません。

今大会で私の技量の未熟を思い知りました。さらに修練を重ねたいと思っています。

第21回全日本

</

誠

会式次第
開会式
演武開始

大会式次第

楡周平著『クレイジーボーイズ』読後感想

<<　作成日時 ： 2008/11/23 17:32　>>

2008年11月23日

１957年生まれのこの著者に興味を抱いたのは、『Cの福音』という本を読んでからだ。

主人公の朝倉恭介は、アメリカ生まれの日本人で、子供の頃両親が飛行機事故で亡くなり、孤児ながら莫大な保険金を受け取る。

アメリカの軍事専門大学を卒業し、軍事に関わる専門知識を身に付けると共に、空手を習い有段者となり、格闘家としても滅多に引けをとらない逞しい青年に成長する。

ところが、大学時代に知り合った青年がアメリカを牛耳るマフイアの大物の息子であった縁からそのボスに気に入られ、息子同然の付き合いを求められる。

恭介は日本における麻薬密輸販売の責任者となり、尻尾を捕まれない輸入販売

方法を考案し、暗躍が始まるのである。

彼の扱い慣れた武器はイングラムといわれる銃身の短い自動小銃である。それを駆使して、他の大きな組織、中国マフイア、CIA，FBI，日本の警察と闘う。

そのスケールは壮大で活躍の場は全世界に及ぶ。

朝倉恭介シリーズは、『クーデター』『猛禽の宴』『クラッシュ』『ターゲット』と続き、最後は『朝倉恭介』で終わる。私はその全巻を読んだ。

それらの巻をほとんど紹介することがなかったのは、余りにも面白すぎて立て続けに読んでしまったことにある。

そのときからすでに別の本に取り掛かっており、読後感想を書く暇がなかったのである。そうして二日前に題名の本を読み終えたわけである。

この本の主人公はやはりアメリカ在住の日本人である。父親の仕事の関係でサンフランシスコのバークレー校で学ぶ大学生だ。

友人の白人学生マークの奨めでマリファナやハシュシュをやる少し不良がかったごくありきたりの学生なのである。

ところが、彼の父親が日本の小さな自動車精密製造会社に奉職しているときに、世界中がその発明を目指していた水素自動車をいち早く発明してしまったのである。

そうした業績があってアメリカの大学に教授として招かれ、シリコンバレーに勤務している。

水素を燃料として駆動する自動車はエコカーの究極の発明として全世界から注

目を集め、その特許料は毎年30億円を下らない収入をもたらす金の成る木となった。

しかし、偉大な発明者が勤めていた会社は、特許料は会社に属すると主張したため、発明者（柴山教授）はそれは自分のものであるとする訴訟を起こす。

世界の趨勢からしてもし水素自動車が全世界に普及すれば、一番ダメージを受けるのはどういう産業か、どんな会社か、答えは一目瞭然である。

教授潰しの陰謀が始動し始める。

教授の息子哲治は、父親がやっていることにさほど興味を抱かず、ごく普通の学生生活を送っていたが、ある日サンフランシスコ市警から電話があり、あなたの父親とおぼしき人が他殺死体で見つかったという連絡を受ける。

無残な他殺死体となった父親と対面する哲治は、父の死と関わる意外な事実を知らされる。

母親は哲治が子供の頃すでに離婚していて、絶縁されたように連絡も全く無い。父親の死体を説明する検視官の言葉によって、初めて哲治は離婚の真相を知る。

亡き父親がどういう秘密の私生活を送っていたにしても、殺され方の無残さは、哲治に激しい復讐心を抱かせる。 増してや、誰に殺害されたにせよ、父親の死は裁判に不利となることは火を見るよりも明らかで、敗訴ともなれば、唯一の特許料継承者である哲治には毎年30億どころか、びた一文の金も入ってこない。

敗訴になれば、巨額の裁判費用、家のローンなどを自身で支払わなければならない。一大学生に過ぎない彼にとって目もくらむような不可能事である。

それにはまず、誰が父を殺したのかを突き止めなければならない。

柴山教授の大学に於ける助手であったマークがついに教授殺害の決定的証拠を手に入れる。とはいえ、そのソースを犯罪的方法で手に入れたからには警察に捜査を依頼することは出来ない。

そうこうするうちに、特許の無効を訴えていた会社の持ち株が異常に上がり始めていることを、哲治たちは突き止める。

そのからくりに思い巡らせているうちに、会社の社長が父親殺害に絡んでいるばかりか、その背後に一国の政府を動かすことも出来る巨大な組織が関わっていることを確信し、哲治の「クレイジーな」行動が開始されるのである。

その詳細を述べることは控えた方が良いであろう。その部分こそこのサスペンス小説の眼目だからである。

ただ次のこと位は述べておく必要がある。

哲治はじぶんの身の破滅を覚悟したある極めて知的な作戦を実行するのである。全世界に瞬時に繋がるインターネットを駆使した方法である。彼の武器は、栃木の田舎に住む祖父が所持していた猟銃、ノートパソコン、接続コード、ビデオカメラそれだけである。彼はそれらをバッグにぶち込んで、特許を争う会社の社長室に乗り込んでゆく。

それからの経過を語りたい誘惑は御しがたいが、それをのべてしまうと、読者の愉悦を奪ってしまうことになる。

あとは小説を読んでもらうしかない。読み進めていった人は途中で予感するはずであるが、結末は悲惨なものではない。

小説のストーリーは願望、幻想、おとぎ話、空想といった絵空事に終わる場合が

あるとしても、その過程は、身につまされる現実そのものであり、生で味あう感情であり、知的充足そのものである。優れた作家には過程をリアルに語る力がある。それが小説家の創造力である。

古田武彦著『壬申大乱』読後感想

２００８年１１月３０日

久しぶりに古代史と付き合ってみるか、という軽い気持ちでこの本を借りたのであるが、題名から連想される読書への期待を大いに裏切られた。

後に天武天皇となるあの大海人皇子が反乱を起こして、次代天皇として国の統治者となるはずの大友皇子（天智天皇の皇子）を滅ぼし、自ら次代天皇として権力を握るに至った史上名高い大乱の経過が読めるものと期待したわけである。

ところが書いてあることは、『万葉集』集中の白眉を成す柿本人麿の長歌が、壬申の乱を戦った天武天皇の皇子たちに対する挽歌ではなく、実は九州王朝のみまかりし大王（おおきみ）を歌ったものであることを実証するための一大論考だったの

である。

つまり著者は、天智帝のときに大唐に乗り込んでいって大敗した白村江（はくつきえ）の戦い（663年）の直後に滅んだ九州の倭国王朝の存在をはっきりと認めているのである。何故滅んだかというと、大唐と戦ったのはそのほとんどが九州の倭国の軍勢であり、近畿の大和朝廷は戦いに参加することがなかった、と著者は述べる。

倭（やまと）の国というのは近畿の大和朝廷を指すのではなく、筑紫にあった九州の王朝を指しているというのである。

日本史の教科書にはその欠片も記載されていないことである。

確かに大陸側の史書には、倭の名があり、距離の記述などからしてそれが九州の地を指していることは知られていたことであるが、近畿の大和朝廷の宮廷歌人と目されてきた柿本人麿が筑紫に下向したとき、白村江の戦いに参加して虜囚となった倭国の大王明日香皇子（筑紫君薩夜麻）を偲んで歌ったものであると結論している。

この結論はとんでもない問題を孕んでいる。

というのも、万葉集が編まれて以来、天武帝の皇子たちを歌ったとされる万葉集集中の人麿白眉の歌が、九州王朝の天子をうたったものであるということになると、万葉成立から現代までの1，300年に亘る契沖、真淵、宣長を経て現代に至る著名な万葉学者たちの解説、解釈がことごとく否定されることになるからである。

この本の作者古田氏は、自らの説の畏れ多さに慄きつつも、自説が真実であ

ることを確信しており、例え一万年後であろうとも、自説の正しさが証明されるときがくると述べておられる。

何故九州の筑紫と奈良の大和の混同が起きたかということに対しては、それは明らかに現天皇家に繋がる大和朝廷の権威を高め、全ての記事が大和朝廷に対する賛歌でなければならないと権力側は考え、本来は九州王朝の天子に関する記事であったものを換骨奪胎して、記事（歌）を作り変えたと作者はいう。

さらに厄介なことに、筑紫には大和の地と同じ地名がいくつも存在するということであり、そのことが作り変えに有利に働いたわけである。例えば飛鳥、吉野という地名が筑紫にあるのである。

学問的で厳密な実証を積み重ねてゆく論証をたどってゆく内に、私はかつて哲学者の梅原猛が聖徳太子とその一族の死の真相に迫る『隠された十字架』や柿本人麿の死の謎に挑んだ著作を読み進めたときの興奮を蘇らせながらこの本を読み終えた。

すでに80歳を超えておられる作者は、数十年来の主張に対して、学会からも研究者からも自説に対する何の反応もないと嘆いておられるが、一万年後とは言わないまでも、その勇気ある説がせめて古田氏が存命されている内に、万葉学者によって取り上げられることを期待する次第である。

「日本文化の祭典」in日比谷公会堂

<< 作成日時 : 2008/12/06 22:52 >>

2008年12月6日

この出し物の出演は、公演（10月29日）の一週間前に決まった。
紆余曲折があり説明すれば長い物語になるが、三部構成になっている第三部のメーンを、私が所属する日本文化普及会ジパング藍の会で引き受けることになった。

一週間という期日では踊りなどは無理であり、結局は即興が可能な刀道の私と書フォーマンスの山後さんの二人で担当するということになったのである。

日比谷公会堂というと2千人のキャパを有する大会場である。
どれだけの人たちがやってくるかという興味が普通の状態なら湧くところなのであるが、本来メーンであった第三部出演の団体がごっそりと抜けた（その理由についてははっきり聞かされてはいない）後のいわば代役なのであるから、その団体の演目を観に来ることになっていた観客が来るはずがない。

チケットは一枚5千円であり、その団体が2千人を集めるという話だったのである。プロデューサーにとっては棚からぼた餅のうまい話だったはずであるが、ぽっかり穴が空いたことによって顔面真っ青の大慌てとなった。

そこで白羽の矢が立ったのがわたしたちだったわけである。公演一週間前のこと

ですよ。

ふたを開けてみると思ったとおり、２千人のキャパに百人程度の人がぽつんぽつんと座っているだけである。
だからといって、出演する私たちに手抜きは許されない。ギャラの交渉でも妥結をしている。

全体としては三部構成になっており、第一部は有識者によるシンポジューム「未来に架ける日本の道」、第二部は土着文化の宴「日本の花・歌・踊り」、第三部が私たちが出演する「日本伝統文化の宴」という趣向である。

私は三つの試斬台に立てた藁を斬るいつものお膳立てであったが、決められた順序と刀法で藁を斬ってゆくだけでは面白くないと思い、当日になって即興でやることにした。

しかも朗唱をしながら藁を斬ってゆくことにしたのである。
藁を斬る順序も斬りかたも全く考えないことにして、目に入った藁をともかく斬り捨てることにしたのである。
むろん始めての経験である。

第三部のテーマが「月」ということであったので、とっさに思い付いたのが「水月の位」という言葉である。

「晴れ亘った夜空に満月が煌々と輝いている。その月が波のない水面に映れば、まん丸であるが、波のある水面に映れば歪んで見える」

と高唱し、「水月の位！」と叫んで目の前の巻き藁を袈裟と水平で斬る。

刀を鞘に納めステージを歩いてさらに、

「武士道を注視せよ。弱きを助け強きをくじき、事が起これば自身の死を賭してそのことに向かう。精神の強さとその勇気に我々は学ばなければならない」

と横の藁を抜き打ちで斬る。

「私たちは、今のこの一瞬一瞬を大切にしなければならない。生きているからこそ、力が湧き、勇気が出る。この一瞬のために私は生きる」

突き、裏入り身の技で斬り上げ、最後に渾身の気合を込めて折敷の水平。

「イヤァー！」という気合が会場にこだます。

斬り損じが一回あったものの即興試斬はうまくいったといって良いであろう。

終了後出口で観客から賛辞を頂いた。これからの試斬のスタイルになりそうだ。

経験を重ねてゆくことが必要なのだ。心の中から夾雑物を追い出し、無心となって対象に向かってゆくことが出来るために。

佐藤雅美著『幽斎玄旨』読後感想

２００８年１２月１９日

表題の幽斎というのは、いうまでもなく幕末まで続いた肥後細川家５４万石の藩祖ともいうべき細川藤孝のことである。

幽斎玄旨は、入道となって引退後に名付けた名である。

時の覇者であった信長、秀吉、家康に仕え、下克上の戦国時代を巧みに泳ぎ亘り歩いて天寿を全うし、あまつさえ大大名としての領国をいささかも損なうことなく、子孫繁栄に導いた偉人ともいうべき人物である。

この人は文に秀でた傑物としても名高く、特に和歌の分野では第一人者であり、藤原定家以来連綿と続く古今集秘伝を伝授された伝説上の人物でもあるのだ。

とはいえ彼は何よりもまず武将であり、晩年に至るまで槍を手に持って馬に跨り

戦場を疾駆する戦士であった。

いってみれば歌は出陣の合間に勉強し歌想に励んでいたわけである。

しかもただの武将ではない。

室町幕府第12代将軍足利義晴の実子なのである。世が世なら13代将軍になってもおかしくないところであるが、妾妻の子として生を受けたがゆえに和泉の細川家の養子となった。

だが、義晴の嫡男第13代将軍の義輝が松永弾正と三好三人集によって討たれてから、彼の流浪の人生が始まる。

彼が一気に時代の表面に躍り出てきたのは、殺された義輝の弟であった後の第15代将軍義昭(当時は興福寺の門跡覚慶)を救い出し、新将軍に据えることに成功してからである。

そこに織田信長の登場である。

彼の立場の危うさは時代状況によっても一目瞭然である。新将軍と信長の間にあって苦渋を舐めながら両者の間を行き来し、その間明智光秀と知遇を得、終には信長の家来となるのである。

その間の駆け引きや苦渋の様を作者は長いページを割いて十分に活写している。

しかし、信長が京都本能寺で明智に討たれると、義孝はこれまで親しく付き合ってきた明智の同盟への誘いを断り、息子与一郎(後の忠興)と共に頭を丸めて出家を装い、光秀を征討した秀吉に臣下の礼を取ることになる。

そうせざるをえなかったともいえるが、情勢を的確に判断することが出来た藤孝の勝利といえるであろう。

狂気の沙汰ともいえる秀吉の朝鮮出兵には息子忠興が従軍し、華々しい戦果を挙げる。

秀吉は朝鮮半島はおろか、大明国を手中に納める予定であったばかりではなく、遠く南蛮(インド、ヨーロッパ)をも征服する腹積もりであった。痴呆症状という他はない。

当然のごとく、秀吉の大陸出兵は失敗に終わったが、戦後処理に当たってひと悶着が生じる。

従軍武将の軍監的役割を担っていた秀吉の側近石田三成が、忠興をはじめ、加藤清正、福島正則、浅野長政らの戦功を過少に見積もり秀吉に報告していたということが遺恨問題となり、秀吉の死後起こった関ヶ原の戦いで、秀吉子飼いの武将であった上記の武将たちが主君側を見切って、家康側に付いてしまう。

藤孝(その頃はすでに幽斎と名乗っていた)も子の忠興と歩調を合わせ、ついには家康側の勝利が呼び込まれることになるのである。

幽斎は隠居用に与えられていた小城を三成方の大軍に包囲されあわや落城かという寸前に、定家以来の和歌の古今伝授が、藤孝の死によって滅びるのを憂えた後陽成天皇の勅じょうによって、囲みから脱出することが出来た。

文が命を救ったわけである。

一方で、豊臣側に恩顧のある義孝が自陣に味方しないということに激怒した三成

は、人質として大阪城域に留めている忠興の妻玉姫(細川ガラシャ)に対し、城に出頭するように兵を送るが玉姫はそれを拒否し、家来に胸を突かせて死んでしまう。

　史上名高い美女の玉はいわずと知れた明智光秀の娘であるが、武将の子にふさわしく豪胆な人であったという。 あるとき、夫の忠興が家来を手打ちにした血刀を玉の着物の袖で拭いたのだが、玉はそ知らぬ顔をして何日も血の付いた小袖を着ているので、堪りかねた忠興が

「着替えたらどうなのか」

といい、ついでに嫌味がてら、

「そちは蛇のような女だのう」

といったところ、玉は、

「鬼の女房には蛇のような女が似つかわしいのではありませんか」

と答えたという(436頁)。

　玉姫は細川家の身代わりとなって死んだといえよう。

　家康に気に入られた細川父子は、丹後一国から豊後半国を加増され、さらにそれから22年後に清正亡き後の肥後54万国の太守となり、以後改易されることなく幕末を迎えた。

　小説の構成は信長から家康に亘る戦国時代を駈け足に辿るが、細川父子のしたたかで、しなやかで、また豪胆でもある生き方が活写されていて読み応えがある。

戦国時代という激動期において、文武両道を全うして生き抜いたこの武将は、オーラに包まれた説得力に満ち満ちている。

高野澄著『武芸者で候』読後感想

２００８年１２月２０日

　宮本武蔵を描いた小説である。

　吉川武蔵の像をひっくり返そうとして、最新の武蔵研究の成果を取り入れているらしいことが分かる。

　全巻読み終わりあとがきに進んだとき、作者が

「ぼくは、剣技の実際についてほとんど無知なのである。」

と書いた箇所を読んだとき、奇妙な感覚に囚われた。

　剣技に無知であっても剣客を扱う大枚の小説を書けてしまうということに、めくるめく感覚を味わったのである。

そういえば、吉川英治が剣術を習ったことがあると聞いたことはないし、柴田錬三郎や藤沢周平や司馬遼太郎がどこかの剣術流派に所属したことがあると聞いたこともない。

柳生新陰流に詳しかった五味康祐が剣術を習っていたということを何かで読んだ記憶もない。

それでも彼らは迫力のある剣豪小説を書くことが出来たのである。作家の想像力に感歎しないわけにはいかない。

一方で、短期間でも剣技の実際に触れた作家も数多い。

思い出すままに述べてみると、中里介山、戸部新十郎、池波正太郎、津本陽、鳥羽亮などは、剣術修行の経験がある。経験のある作家の記述には具体的な剣技が述べられていて興味深いものがあることは確かである。

武蔵を描いた小説は掃いて捨てるほどあるが、吉川武蔵を終に超えることが出来ないのは、作家の想像力と構想力、それに精神力が及ばないということになるであろう。

ところで、表題の小説であるが、作者が剣技に無知であると告白するだけあって、武蔵が使う業についての描写がほとんどない。皆無といってよいくらいだ。

武蔵の円明流ないし二天一流の具体的な業の解説を作者は意図的に省いている。

なぜなら、作者は資料に基づいた武蔵像を描くことに力点を置いているらしいからである。

その二三点について述べてみよう。

まず、吉川武蔵に代表されるように,生地は作州讃甘（さのも）村宮本とされるのが通説であるが、作者は、次のように述べている。

「手に入れられたかぎりの知識の範囲でいうならば、播磨の印南郡すなわち現在の高砂市の米田で生まれ、佐用郡の平福で育ったという折衷的な説に親近感を持つ。」

次に、『五輪書』のほぼ冒頭に、

「十六歳にして但馬国秋山と云強力の兵法者に打勝」とあり、武蔵は秋山の名すら記していない。

文章はその一行それだけであるので、どのようにして勝ったのか、木刀の勝負なのか真剣での命のやりとりなのか、秋山とはいったいどのような人物なのか、一切分からない。

従って、どの伝記も小説もそれ以上踏み込むことはなかったところを、作者は想像力を駆使して秋山との戦いの模様を具体的に記述している。

さらに、かの有名な京都の吉岡一門との戦いであるが、作者は、吉岡家に伝わる伝書『吉岡伝』の記述を重く見、試合は吉岡清十郎とのみの勝負であったとし、しかも勝負は引き分けであったとしている。

その後の、弟伝七郎との試合、清十郎の子の又七郎を真っ二つにして多数の門弟と戦い逃げ延びた、という『小倉碑文』『二天記』の記述に疑問を呈している。

吉岡一門との三度にわたる試合の結果、吉岡家は、将軍家剣法指南としての立

場を失い廃業に至ったということに対しても、それは別の理由によるものであり、武蔵の養子の宮本伊織が武蔵の戦いの結果と結びつけて話を創作したとする
等々。

さて、これほどに名高い歴史上の人物でありながら武蔵伝説には謎が多い。

前に述べた出生の地にしても、あまたの作家・評論家が原典として引用する、山田次朗吉『日本剣道史』、富永堅吾『剣道五百年史』は美作説を採っている。
武蔵自ら『五輪書』で、「生地は播磨」と書いているにも関わらずである。
精緻な文献批判で名高い武道研究家綿谷雪(わたやきよし)氏は高野氏と同じ播州の米田説である。

しかし最大の謎は巌流島の決闘に関することである。

武蔵の名をいやがうえにも高めることになったこの決闘について、武蔵は何故『五輪書』に記さなかったのであろうか？
武蔵が一言も触れていないために、あれは伊織たちの創作であったのではないか、等といわれたりもするのである。
しかしながら、巌流島の決闘が行われたことについては、『細川家文書』などの資料によって事実であることが判明している。
また小次郎が巌流と名乗り、細川家の剣術師範であったことも確かである。

では何故かということに関して、納得できる説明をまだ見聞きしたことがない。

私の推測はこうだ。

佐々木巌流は少なくとも細川家の剣術師範であった人であり、後に(客分ながら)細川家に召抱えられることになる武蔵にとって、巌流を斃したことを蝶々することははばかられたからではないか、ということである。

さらに、佐々木巌流という人物については、まったく謎というしかない。

通説に越前一乗谷浄教寺村出身であり、同じ浄教寺村出身の富田流小太刀の名人富田勢源に剣を習ったとされる。

勢源が美濃の太守斉藤義竜（1527～61）の要請で梅津某との試合を行ったのが1560年であり、40歳を少し出たばかりの頃とされている。

仮に巌流がその頃20歳であったとしよう。

巌流島の決闘が行われたのは1612年(慶長17年)であるから、巌流は72歳になっていなければならない。

このことだけからしても、巌流小次郎が猩猩緋の派手な袖無し羽織を着た若者であったはずはない。

さらには、佐々木巌流という存在そのものが怪しくなってくる。

それでは武蔵の相手をした謎の人物は？となるともうお手上げなのである。

さて、表題の本の中身に戻ろう。

この本の中で作者は大きな間違いを犯している。 このことは巌流の年齢とも関係がある。

勢源は、名人越後とうたわれた富田越後守重政（1554～1625）に学んだと作

者は書く。事実は逆である。

勢源の弟に与六郎景政という人がおり、この人の婿養子が重政なのである。

従って勢源は重政の義理の叔父に当たる。

それゆえ、もし重政が勢源の剣の師匠であるとするなら、おおむね巌流小次郎は30歳代ということになり、的確な年齢ということになるわけだ。

資料に詳しい作者のことであるから、勢源が重政の義理の叔父に当たるということなど先刻承知の上で、わざと勢源を重政の弟子に格下げしたとしか考えられない。

悪質な捏造という他ない。

このことでも分かるように巌流小次郎の存在は作家たちを永遠に悩まし続けているのである。

武蔵については語りたいことはまだ山ほどある。何かの本に出くわしたときに、また語ることにしたい。

岳真也著『福沢諭吉』1～3巻　読後感想

2008年12月31日

私は出来るだけ厚い本を読むのが好きだ。

図書館に行っても（よほど読みたい本は別として）できるだけ分厚い本を借りてくる。

表題のこの本は一冊づつからすれば大して分厚くはないが、三巻の延べ頁数は優に千ページを超えるから、全体とすれば分厚い本といえる。

私は慶応義塾の出身ではないし、普段から福沢諭吉に興味を抱いているわけではないが、諭吉が晩年に至るまで居合を抜いていたということ何かの本で読んだことがあり、ひたすらにその点からのみの興味で、この大冊を紐解く気になったのである。

むろんこれは剣術の本でもなんでもなく、明治期の偉大な啓蒙思想家、また教育者であった人の伝記であり、居合の記述や稽古風景を述べたくだりを期待するわ

けではない。

確かに居合の稽古をしていたことについて何箇所か記述があるが、申し訳程度にしか触れられていない。

流派は「立身新流」という聞いたことのないものである。

故郷の豊前中津藩の下士の子として生まれ、故郷で中村庄兵衛という人に習ったらしい。

後に調べてところでは、60歳を超えてもなお一日千本もの居合を抜いており、半端な修行でなかったことが分かる。

ほとんど達人の域に達していたであろう。

この三巻本は一巻目が「青春篇」、二巻目が「朱夏篇」、三巻目が「白秋篇」ということになっている。

それぞれの巻に沿って彼の足跡を辿るなんてことはすまい。

ただ私の感覚に訴えてきたエピソードなり記述なりを思いつくままに述べ立てることにする。

まずは彼が稀代の大酒のみであったことである。

大阪に出てきて緒方洪庵の適塾に学び、他の塾生たちと腰が抜けるほどまで呑んだ。

夏の暑い最中には全員ふんどしも付けない真っ裸で、適塾の物干し台に上がってドンちゃん騒ぎをした。

当時塾生は全員泊り込みだったのである。

適塾では蘭学を学び塾頭になるほどの優秀な人材であったが、やがて故郷の中

津藩から辞令があり、江戸に上って藩士たちに蘭学を教えるように命じられる。

幕末の風雲急を告げる時代であり、攘夷の嵐が吹き荒れていた。憎むべき紅毛毛唐の言葉を学んでいるということで、攘夷の志士たちに何度も付け狙われたこともある。

アメリカ、イギリスが力を伸ばしてきて、蘭語がほとんど役に立たないということを知り、懸命に英語を勉強するようになったというところに、彼の頭の切り替えの速さと先見の明をみることができる。

特に誰に教わったというわけではない。英蘭辞書を頼りに持ち前の粘り強さで寝食を忘れて勉学に励んだ。

そうして終に咸臨丸に乗り込んでアメリカに渡る機会を得た。

往路は荒れた日が続いて乗組員全員大変な目に遭った。みんな吐くだけ吐いて船室に横たわったまま半病人の態であった。

しかし、諭吉一人けろりとして船酔いもせず、航海の間中ちびりちびり酒を呑んでいたという。

提督は木村摂津守喜毅（よしたけ）、艦長はかの勝麟太郎義邦(海舟）という取り合わせであった。

この航海で諭吉は、ことごとく提督の木村と衝突する勝の傲岸不遜さと身勝手さに辟易し、死ぬまで勝を忌み嫌うことになる。

サンフランシスコに上陸し、盛大な歓迎を受けた一行は様々な珍しい体験をし、一週間ほど後に帰路の旅についた。帰路は往路とは全く違って晴天続きであったという。

さらに諭吉はこの後、外交交渉の通訳としてポルトガル、イギリス、フランス、オランダ、ロシアを歴訪している。帰国後『西洋事情』を著わし大いに売れた。それからまたアメリカに渡っている。アメリカに注文していた軍艦の引渡し交渉をするためである。

幕末史に残る様々な事件を経て慶応元年を迎える。

諭吉は芝に放置されていた屋敷を買い取り、そこに学舎を建て慶応義塾と名付ける。

諭吉の大活躍が始まるのはこれからだ。

戊辰戦争も終わり、世の中が落ち着いてきて、彼の著作のスペードも加速度を増す。

むろん、順風満帆というわけにはいかない。塾生が減り続けて経営が成り立たず政府から資金を借りようとするが巧くいかず、塾を畳もうとしたことさえある。

それでも何とか持ちこたえ、塾は存続し三田に広大な敷地を借りて新校舎を建てる。

彼は義侠の人でもあり、細菌学者の北里柴三郎のために研究所を建ててやったり、朝鮮独立に奔走する朝鮮人の志士たちに多額の援助金を与えたりしている。

『学問のすすめ』『文明論の概略』などが次々に出版される。

内戦の終わりと共に、幕臣であったひとびと次々に新政府の要人に抜擢されてゆく。勝海舟しかり、榎本武傭しかり。

早くから市井の一市民であることを貫いた諭吉は堪忍袋の緒が切れ、『痩せ我慢の説』を著わして、勝と榎本をなじるのである。

居合を一日千回抜く諭吉はこの著作で武士道精神の体現者となっている感があ

る。勝や榎本がどう弁明しようと諭吉に軍配を挙げざるをえない。

　自らが成すべき全てのことを成し終えて諭吉が脳溢血でこの世を去ったのは、明治 34 年(1901)新年が明けた翌月のことである。享年 67 歳。